



# 横浜を 代表する 公共建築

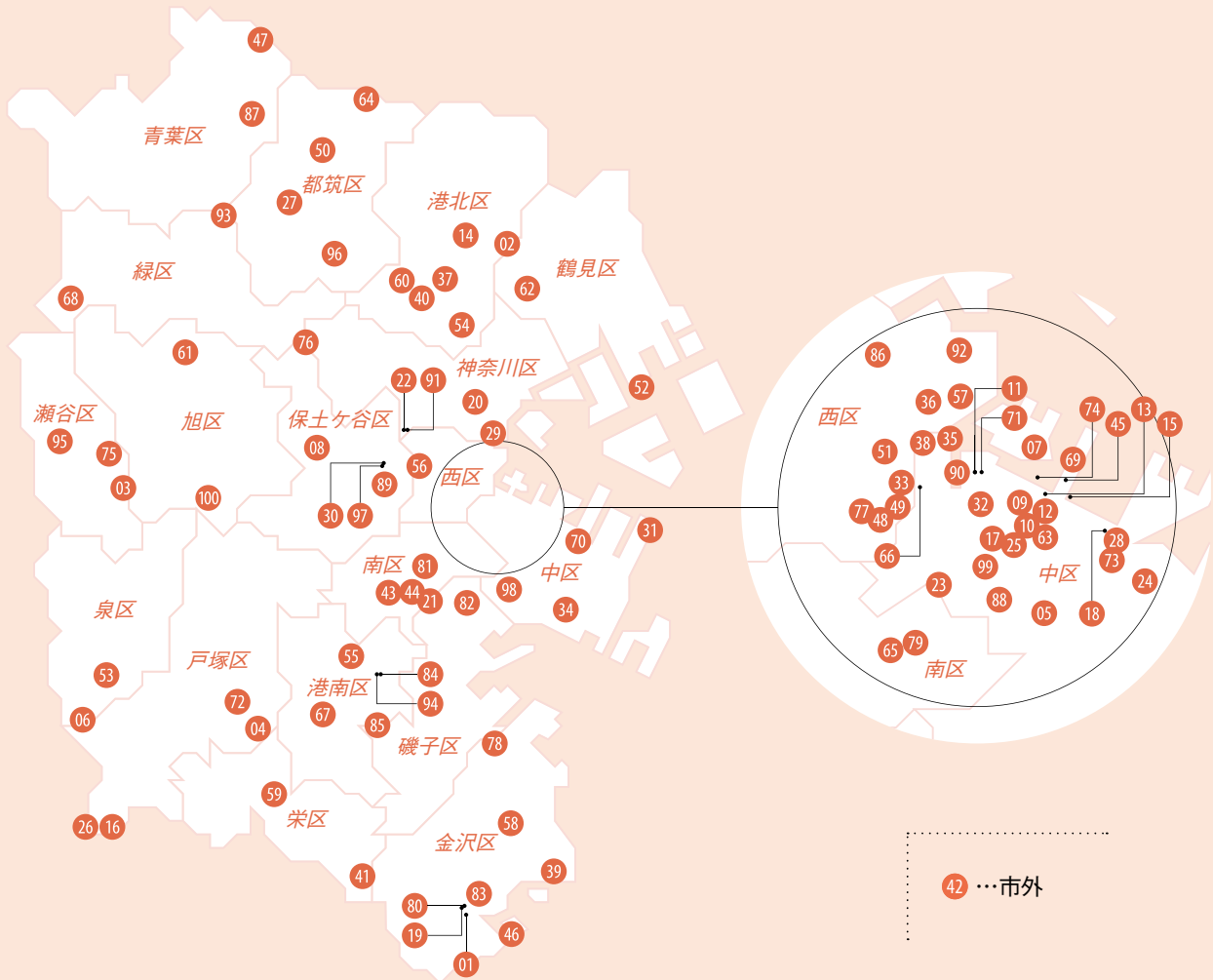
横浜を代表する公共建築100施設

[日刊建設通信新聞社 編集]

# 横浜を代表する公共建築100施設

2022年4月1日～2023年3月31日、日刊建設通信新聞社の『建設通信新聞』紙上で、横浜市公共建築100周年を記念したシリーズ企画が実施されました。代表的な24施設を大きく取り上げ、その他76施設と合わせた100施設が紹介されました。本章では、その24施設の新聞記事を再編集して掲載するとともに、「横浜を代表する公共建築物」として100施設を掲載します。

※役職名は新聞掲載当時、設計事務所、施工者名は建設当時、株式会社等社名は一部省略



- 01 旧円通寺客殿  
(旧木村家住宅主屋)
- 02 旧横溝家住宅主屋
- 03 旧大岡家長屋門
- 04 旧金子家住宅主屋
- 05 外交官の家
- 06 旧清水製糸場本館  
(天王森泉館)

- 07 横浜赤レンガ倉庫
- 08 西谷浄水場  
(旧整水室上屋、旧浄水井上屋、  
旧配水井上屋)
- 09 開港記念会館
- 10 THE BAYS  
(旧関東財務局横浜財務事務所)
- 11 旧第一銀行横浜支店

- 12 横浜都市発展記念館・  
横浜ユーラシア文化館  
(旧横浜市外電話局)
- 13 横浜開港資料館  
(旧横浜英国総領事館)
- 14 大倉山記念館
- 15 インド水塔
- 16 俣野別邸



- 17 7代目市庁舎
- 18 横浜マリントワー
- 19 横浜国立大学  
金沢八景キャンパス本校舎
- 20 神奈川区総合庁舎  
(神奈川区役所・神奈川消防署)
- 21 三殿台考古館  
住居址保護棟
- 22 ミツ沢公園球技場  
(ニッパツミツ沢球技場)
- 23 中消防署
- 24 大佛次郎記念館
- 25 横浜スタジアム
- 26 西部水再生センター 管理本館
- 27 都筑工場・都筑ふれあいの丘  
(都筑地区センター・横浜あゆみ荘・  
つづき緑寿荘・都筑プール)
- 28 横浜人形の家
- 29 中央卸売市場本場(再整備)
- 30 消防司令センター
- 31 横浜港シンボルタワー
- 32 市民文化会館関内ホール
- 33 横浜市民ギャラリー  
(旧いせやま会館)
- 34 三溪記念館
- 35 横浜みなと博物館
- 36 横浜美術館
- 37 横浜アリーナ
- 38 みなとみらい21・  
クリーンセンター
- 39 横浜国立大学附属病院
- 40 障害者  
スポーツ文化センター  
横浜ラポール
- 41 上郷・森の家
- 42 道志村水源林管理所
- 43 南図書館・弘明寺公園プール
- 44 大岡健康プラザ  
(南スポーツセンター・大岡地区  
センター・地域ケアプラザ)
- 45 大さん橋心頭ビル
- 46 野島青少年研修センター
- 47 こどもログハウス  
(ロケットハウス)
- 48 急な坂スタジオ・野毛山荘  
(旧老松会館)
- 49 中央図書館
- 50 歴史博物館
- 51 横浜能楽堂
- 52 高齢者保養研修施設ふれーゆ
- 53 下和泉地区センター・  
地域ケアプラザ
- 54 篠原地区センター・  
地域ケアプラザ
- 55 東永谷地区センター・  
地域ケアプラザ
- 56 西スポーツセンター・  
浅間町営業所
- 57 横浜みなとみらいホール
- 58 長浜ホール(横浜検疫所  
長浜措置場旧事務棟)
- 59 栄区民文化センター リリス
- 60 横浜国際総合競技場  
(日産スタジアム)
- 61 よこはま動物園南入口ゾーン  
(管理センター、アクアテラス、  
リングゲート)
- 62 馬場花木園休憩棟
- 63 洗手亭
- 64 横浜国際プール
- 65 横浜国立大学附属  
市民総合医療センター
- 66 横浜にぎわい座
- 67 野庭地区センター・  
地域ケアプラザ
- 68 北部斎場
- 69 横浜港大さん橋  
国際客船ターミナル
- 70 みなと赤十字病院
- 71 みなとみらい線 馬車道駅
- 72 倉田コミュニティハウス
- 73 アメリカ山公園(建築物)
- 74 象の鼻テラス
- 75 瀬谷区総合庁舎  
(瀬谷区役所・瀬谷公会堂・  
瀬谷消防署)
- 76 動物愛護センター
- 77 野毛山展望台
- 78 衛生研究所
- 79 南区総合庁舎  
(南区役所・南公会堂・  
南土木事務所・南消防署)
- 80 横浜国立大学YCUスクエア
- 81 蒔田消防出張所
- 82 市電保存館 しでんほーる
- 83 金沢区総合庁舎  
(金沢区役所・金沢公会堂・  
金沢消防署)
- 84 港南区総合庁舎  
(港南区役所・港南消防署)
- 85 日野こもれび納骨堂
- 86 みなとみらい本町小学校
- 87 荇田コミュニティハウス
- 88 寿町健康福祉交流センター・  
寿町スカイハイツ
- 89 保土ヶ谷消防署
- 90 8代目市庁舎
- 91 横浜国立大学市民病院
- 92 横浜みなとみらい  
国際コンベンションセンター  
(パシフィック横浜ノース)
- 93 山下地域ケアプラザ
- 94 港南公会堂・  
港南土木事務所
- 95 瀬谷区民文化センター  
あじさいプラザ
- 96 都田地区センター・  
地域ケアプラザ
- 97 消防本部庁舎
- 98 根岸森林公園トイレ  
(芝生広場前)
- 99 横浜BUNTAI
- 100 万騎が原小学校





58

第3章 横浜を代表する公共建築

市政が施行された1889 (明治22) 年から今日まで、横浜市の発展とともに歩み続けてきた市庁舎は、2020年6月29日に開庁した現在の施設で8代目となる。市民に開かれた、これからの横浜市を象徴する施設づくりに込められた意図を紹介する。

## 記憶を表象 品位あるシルクの質感

デザイン監修を担当した建築家  
榎文彦氏——

横浜市役所は、開港以来の歴史ある関内地区と新都市のみならず、みらい21地区の接点でもある北仲通南地区に立地する。したがってまちの結節点として周辺エリアとの強いつながりをつくり出し、まちそのものが入り込んだ

ように開かれ、市民のさまざまな活動や憩いの場にもなるようにこの市役所は構想されている。

既存する周辺の街並みのスケールと軸線を考慮しながらそのボリュームを分割し、隣接する横浜アイランドタワーと連続する一体的な景観を形成している。市庁舎は3層構成とし、高層部

に行政執務関係のスペース、中層部に議会関係のスペースを配置し、低層部にはアトリウムを中心に、市民利用施設、商業施設など市民に開かれた空間となっている。

高層棟は白いシルクのような質感を伴った外観デザインにより、シルクに所縁のある横浜港の記憶を表象するとともに、国際都市にふさわしい市庁舎と





横氏



アトリウム

してのウォーターフロントのエレガンスのある佇まいを見せている。そして低層部には西側の大岡川に沿ってプロムナードや広場が広がり、それに面する市民ラウンジや商業施設も含めて、市民に対して望ましいパブリックスペースをも提供しているといつてよい。

例えば今回、市役所とJR桜木町駅の間にも新設した人道橋を渡ると川沿いのプロムナードはそのまま市役所の前面を介して北仲通北地区に展開するホテル、住居施設につながっていく。市役所はこうした広域の周辺エリアをつなげる焦点を形成していることが分かる。このように都市デザインという見地からも市役所はユニークな存在となりつつあることが明瞭である。

市役所のアトリウムは人間の動きという点からいえば、その焦点でもある。公共交通機関には人道橋で桜木町駅とつながるとともに、エスカレーターによって地下鉄の馬車道駅とつながっている。そしてアトリウムはここから水平に市庁舎空間につながり、エスカレーターで昇れば市

役所の行政関係や議会関係の受付ロビーにアクセスすることができる。このように内外空間にもこのアトリウムが焦点の空間として存在している。アトリウムは都市の中で、市民の日常空間、あるいは非日常空間の核を形成しているのである。

市役所の内外のパブリックスペースにおいて、いつも人びとが集いさまざまな情景が展開される。この周辺エリアとつながるパブリックスペースを通して、市民にとって市役所が、横浜の過去に記憶が照射され、あるいは現在という存在が確認され、さらに未来に対する予兆が感じられる、横浜の象徴の場所となっていくのである。

## 高度な技術結集し 細部まで デザイン徹底

横浜市前建築局長（現政策局長）  
鈴木和宏氏——

大地震が発生しても業務継続できる、災害に動じない市庁舎を造ることが大きなミッションであり、SDGs未来都市に選定さ

れた市として環境性能の高い建物を自ら造って範を示すことが社会的責任として求められました。街の結節点に建つ、市民に開かれた庁舎としてのシンボル性や景観への配慮、大岡川沿いの水辺の空間を生かすことも重要なテーマでした。

これからの横浜を象徴する市民に親しまれる建物となるためにデザインは非常に重要です。設計・施工者である竹中・西松建設共同企業体の持つ高度な技術力とともに、デザイン監修者として横（文彦）先生に参画いただき、細部まで目が行き届く仕組みを取り入れたことは非常に良かったと思います。



鈴木氏

# 横浜美術館

横浜美術館は、多様な市民のニーズに応えた「開かれた美術館」として、1989年11月に開館した。設計は日本を代表する建築家である丹下健三が担当。みなとみらい21地区に完成した最初の恒久施設であり、その後のまちづくりを先導する役割も担ってきた。現在進めている大規模改修の設計を手掛ける丹下都市建築設計の丹下憲孝会長に、親子2代にわたって設計に携わる思いを聞いた。



自然光が差し込む開放的なグランドギャラリー

## 「みる・つくる・まなぶ」を具現

前面のグランモール公園中央から海に至る緑（植栽）と水で整備された歩行者空間。この「緑と水の都市軸」を受け止めるように、美術館は中央部を高く、左右にゆったりと広がったシンメトリの重厚な全体構成としている。「みなとみらいの文化ゾーンを中心としてのあるべき姿とは何か。当時まだなにもなかったみなとみらいに、総合的なまちづくり

の〴〵へそ、である部分はこうあるべきだ」というものを示す。その使命を感じて設計したのだ」と語る。

国際港湾都市にふさわしい世界に開かれた美術交流の場であると同時に市民や芸術家に創造活動の場を提供する。この基本理念に基づき、構想段階で市側から提唱されたのが当時としては斬新な「体験型」の美術館だ。

使いやすい美術館としての機能と文化的シンボルとしての外観が両立する施設も求められた。

都市軸に合わせる形で高層化した半円形の中央部には、美術館の象徴である収蔵庫を積み上げることで「アートに対するリスペクト」も込めたという。同時に、「何もないところから街ができてくる。そのワクワク感を含めて街の建設プロセスを市民の皆さんにも見てもらえるような展望台をつくらう」と、最上階





©村井修

## 街を先導する「開かれた美術館」

ショップなどを配した。

この収蔵・展示スペースの左右には図書館・レストラン棟とアトリエ棟を配置。「みる・つくる・まなぶ」を建物が表象する形としている。「市の皆さんの思いや斬新なアイデアをいかにして都市計画家であり建築家として実現するか。その解答がこの形だった」とも。

海外の文化をいち早く取り入れて発展してきた国際港湾都市らしい一歩先をいく先進性とそれを具現化する建築家の構想力。それが、わが国最大規模となる現代アートの国際展「横浜トリエンナーレ」などの活動に結実していく。2011年以降はそのメイン会場として、誰もが多様な表現に触れる機会を提供し、新たな価値観や文化を世界に発信。現代アートを通じて世界の芸術家の活動の場、市民との交流の場として発展し、国内外から注目され評価される美術館となっている。

大規模改修工事は21年3月からスタートした。2年以上の長期休館は開館以来初となる。老朽化が進む施設や設備を更新して長寿命化を図るとともに、「あらゆる人に開かれた新しい価値を創造・発信し続ける美術館」を今後の使命＝ミッションに掲げ、より使いやすく心地よさを感じられる空間へとブラッシュアップしていく。

具体的には、常設・企画展示

室とも天井高さを上げ、展示作品に対する照明の当て方も見直すなど、「専門家を交えてモックアップによる検証を行いながら、できるだけ多様な作品に対応できる形にしていく」考えだ。

美術情報センターは市民が利用しやすいよう現在の3階から広場に面した2階に移設し、移設後の3階は将来的な収蔵スペースとする。空調設備更新のほか、バリアフリー対応として、グランドギャラリーとレクチャーホールにはエレベーターを新たに設置。グランドギャラリー天井の開閉式ルーバーも更新し、より明るく開放的な空間としながら耐震補強も実施する。

「従前以上に街に開いていくことで周辺の建物との関係性をより強くし、連携して賑わいをつくっていく。次の30年、50年に向けて、市民や来訪者がより来館しやすく、芸術作品に親しめるようにしたい」と思いを込める。



展望ギャラリーから見るみなとみらい21地区・丹下氏

丹下都市建築設計会長 丹下憲孝氏に聞く

(8階)に展望ギャラリーを設けたのも特色といえる。

収蔵庫の足元には、この美術館最大の特徴となる2層吹き抜けの大空間「グランドギャラリー」がある。長さ100m、高さ20mの自然光が差し込む明るい空間には階段状のプラザが設けられ、各種イベントに対応する。これを介して上部には七つの展示室がまとめられ、下部には情報提供コーナー、会議室、レクチャーホール、ミュージアム・

# 大倉山記念館

横浜市港北区にある「横浜市大倉山記念館」は1932年、実業家で教育者・思想家の大倉邦彦が「大倉精神文化研究所」として開設した東西精神文化の研究・実践施設を前身とする。81年に横浜市が寄贈を受け、現在の名称になった。設計者の長野宇平治は大倉の思いをギリシャ文明以前の「プレ・ヘレニック様式」で形にした。建築家の隈研吾氏は小さいころ、生まれ育った自宅近くにあったこの研究所の周りでよく遊んだ。子どもの目にはただ不思議な建物として脳裏に焼き付いていたという。

## 建築家 隈研吾氏に聞く

幼かった隈氏にとってその建物はただ不思議だった。いつの時代のものなのか、見たことのない建物。洋風でも和風でもない。これが外国にある古代の神殿なのか。その建物は、横浜市の自宅すぐそばの丘陵、大倉山に建っていた。大倉山とその山裾に広がる農家、田畑、ため池などは子どもたちの格好の遊び場だった。東京・田園調布の幼稚園から電車で帰ってきて、オニヤンマを追っかけ、ザリガニを取り、山を登って不思議な建物の周りで遊んだ。田んぼの一面では新幹線の新横浜駅の工事が始まろうとしていた。隈氏の

原風景は、こうした典型的な里山だった。

建物の名称は、「大倉精神文化研究所」。文字どおり東洋・西洋の精神文化を研究し、伝統文化を学び心を鍛える場所として設立された。隈氏の自宅の大家は近くの農家で、幼なじみだったその大家の女の子の名前から「ジュンコちゃんち」と呼んでいた。隈氏は、ジュンコちゃん姉妹や近所の仲間数人と、大倉山のやぶをかき分けて登り、記念館によく遊びに行っていたという。

場所に深く依存している樹木のような存在だと自身を語っている著書『僕の世界』（大和書房）に、自分を育んだこの里山の風景は詳しい。著書に関連して、「ジュンコちゃんち」について「農家というのは生産行為の場所。うちのようなサラリーマンの郊外住宅と違って、ジュンコちゃんちは農作業の場所であって、ヤギやニワトリを飼って生産活動をしていた。その生産活動の場所の生き生きとした楽しさっていうのは格別でした」と解説する。この里山での経験は、いま

## 遊び場だった不思議な建築

の自分の建築や生き方に強く影響しているという。

同研究所の建物を設計したのは、長野宇平治。東京駅の設計で有名な辰野金吾の弟子に当たる。長野はこの建築を「プレ・ヘレニック様式」と命名した。特徴は、裾ぼそりの柱、円盤列、三角型空間、ロゼット、山形と螺旋文様の構成装飾など。初期に制作された机、いすなどの什器類もプレ・ヘレニックのデザインに統一している。

「建築を勉強し始めてから、設計した長野宇平治のことを知りました。大倉精神文化研究所はギリシャ文明以前の古代建築、古代のプリミティブな神殿のようところがとても興味深い。クライアントの大倉さんは、東西の壮大な文化、歴史を探求したユニークでおもしろい方だったのだと思います。設計者との触媒作用による共同制作と

## 原風景は農家が建ち並ぶ典型的な里山



隈氏



いえるでしょう。三角形の窓（三角型空間）、古代の神殿のイメージで言うと、バングラデシュのルイス・カーン設計の国会議事堂に近いものがあります。好きな建築ですね」

辰野金吾からはどうしたら大きな建築にもリズムがつくれるのか、そのコツを学んだのではないかと指摘する。「辰野は東京駅でれんがの間に白い石を挟むなど、リズムを刻むバランス感覚を見せている。建築は、大きくても小さくてもリズムをつくりさえすれば良いものになる」



正面外観

## 大倉精神文化研究所理事長 平井 誠二氏の話

大倉精神文化研究所理事長の平井誠二氏はこう話す。

「大倉邦彦は大正時代、大倉洋紙店の3代目社長に就任した時、同社の熱心な社員教育に携わる中で、子どものころからの教育の重要性を強く実感して、図書館を併設した研究所づくりを考えました。一般市民が誰でも自ら勉強して心を豊かに、強くして社会貢献できる立派な人を育

成するのが目的です」

ギリシャ神殿風の外観を持つ研究所の建築は、この大倉の思いを形にしていることが強く伝わってくる空間になっている。

「正面入り口に入って真ん中の吹き抜けのエントランス部分は当初、『心の間』と呼ばれていました。人間の心です。階段を上るとホールがあります。ここは『殿堂』といわれていて、信仰心を表

す厳かな場所として教会、神社、寺のいずれにもあるようなつくりになっています」

エントランスの吹き抜けの塔屋壁面にはライオンと鷲の彫刻、ステンドグラスがはめ込まれ、ステンドグラスからは黄金色の光が差し込み、上部空間全体が金色に輝く。

「エントランスホールに降り注ぐ黄金色の光と殿堂で心を清らかにし、坐禅道場で心を強くして行動を促すということです。中央館の左右には図書館と研究室を配置して知識を得る。大倉が考えた研究所は、中心に心、左右に知性を配して全体で人間を表しています。こうした強く正しい心と豊かな知性を兼ね備えた人間を育てるのが究極の目的でした」



平井氏。ホール（殿堂）入り口前で

建物中央に「心」、左右に「知性」配置



# 象の鼻パーク/テラス

74

2022(令和4)年5月25日掲載



64

第3章 横浜を代表する公共建築

横浜開港150周年の節目となる2009年、横浜港発祥の地に「象の鼻パーク/テラス」が誕生した。オープン以来、憩い・交流・表現の場として、さまざまな出会いを生み出し続けている。象の鼻パーク/テラスを設計した小泉雅生氏と現地を歩きながら、完成までの秘話や空間に隠された秘密を聞いた。

スクリーンパネルのあかりが夜の横浜を優しく包み込む

## 小さいもの並べ大きな風景

かつてこの場所には、1859年の横浜港開港に当たり、直線状の2本の波止場がつくられた。象の鼻パーク内の地面をよく見ると、当時の波止場のうち西側の1本がどこにどのように存在していたか、舗装の色の変化でわかるようになっている。

その後、東側の波止場が徐々に大きくなり、湾曲した形になっ

ていったことから、明治ごろには「象の鼻」と呼ばれるようになる。1923年の関東大震災被災後は、やや直線的な形に復旧され、物揚場や船だまりとして活用された。

象の鼻パーク整備に当たって小泉氏は「実はどの時期の形に復元するのが正しいのか議論になりました。結果として、やはり象の鼻という場所の由来となっ

た明治中期の湾曲した形に復元しましょう」と話にまとまりました」と明かしてくれた。

“シンボル性”の獲得方法にもこだわったという。「この場所は、タワーのような形態でシンボル性を獲得するのではなく、人間の身体感覚に則した、ヒューマンスケールの空間づくりをするべきだと感じました。そう





左：左にあるのが象の鼻テラス。黒い舗装部分が当時の波止場の1本／右：小泉氏

## 小泉アトリエ主宰 東京都立大学大学院教授 小泉雅生氏に聞く

したときに、小さいものを並べて大きな風景をつくるという案が思い浮かびました。その象徴が、水面を大きく円形に囲い込むように配置したスクリーンパネルです。個々のパネルが集まることで、一つの大きな照明のように感じられる。『みなと横浜』の原点を表現しています」

パーク内を歩くと、随所に明治期の港の遺構が使われていることがわかる。なだらかな斜面形状の芝生スペースには、工事中に

地中から発見された明治時代の舗石をベンチとして活用した。

「調べてみると神奈川県真鶴町の小松石であることがわかりました。どうにかして使おうと考え、斜面と並行に並べてベンチにするというアイデアが浮かびました」と語る。

明治中期ごろに整備された鉄軌道と転車台もほぼ当時のままの姿で発見された。転車台

はいまでも回るといふ。工事終盤に出てきたこともあり「大騒ぎになりました。関係者みんな現地に集合して、どうしようどうしようと右往左往」と懐かしむ。続けて、「結果的に現地で展示するのが一番良いという話になり、来街者が自由に見られるようにガラス蓋をかけることにしました」

このほかパーク内では、税関施設の一つだった「煉瓦造2階建倉庫」の基礎部分や関東大震災で沈下した当時の防波堤の一部がそのままの形で保存・展示されている。

公募型プロポーザルで自身が設計者に選ばれた際のエピソードも教えてくれた。

「プロジェクトが開始するタイミングに、横浜税関の当時の税関長から呼び出しがかかりました。行くと、マッカーサー元帥が当時執務していた部屋などを案内されるのです。一体何を言われるのだろうとビクビクしていると、税関長から『象の鼻地区は税関の歴史の発祥の地で、とて

も思い入れのある場所だ。それを理解した上で設計してほしい』との声を掛けられました。ものすごいプレッシャーでした」

その後、遺構の発見など一筋縄ではいかない工事を経て、象の鼻パーク/テラスが無事完成する。「税関長が『ずっと（横浜税関の）執務室から工事の様子を見ていた。柔らかい雰囲気のところが出来上がり、良い場所になった』と言ってくれました」と話す。

オープンから10年以上が経ち、「みんなに認識される場所になってきたと同時に、大人がゆったりとした時間を楽しめる場所であることが認知されてきたと感じています。象の鼻テラスに関しては、障がいのある方とアーティストをつなぐ活動など、意欲的な取り組みが展開されています。この場所で活動されてきた栗栖良依さんは、東京2020パラリンピックの開会式でステージアドバイザーを務められました。象の鼻テラスの取り組みは大きな成果です」と感慨を込める。

過去と現代つなぐ遺構が随所に

# 東永谷地区センター・ 地域ケアプラザ

横浜市港南区の東永谷地区センター・地域ケアプラザは、設計者・伊東豊雄氏の真骨頂である「閉じない建築」の先駆けとなる公共建築だ。伊東氏によると「与条件が明快」で窮屈なところもあったが、そこをすり抜けて緩く自由につくる実験的なことを随所で試みている。後のせんだいメディアテークにもつながっていく興味深い建築である。伊東氏と設計当時の担当者の柳澤潤氏（現コンテンポラリーズ代表／関東学院大学）に聞いた。

## 与条件から逃れる場所をつくる

「どうやって与条件の明快さから逃れる場所をつくり得るかというのが、われわれの大きなテーマでした」。設計者の伊東氏はそう振り返る。面白い公共建築をつくるために立ちはだかる「壁」を克服するには、風穴をあけるのではなく、壁の間をすり抜けるしかないと話す。東永谷地区センター・地域ケアプラザもそうだった。

「正直、窮屈なところもありましたが、エントランスから体育室、図書コーナーの部分はわりと緩く自由につくれるんじゃないかと思いました」。現場監

理を統括していた東建男氏（現伊東豊雄建築設計事務所取締役）、担当の柳澤氏とすり抜ける道を模索した。実はここで、実験的な試みがいくつか展開され、伊東氏の公共建築への考え方の端緒が垣間見られる。せんだいメディアテークにも連なっていくものだ。

担当の柳澤氏は東永谷地区センターの設計が始まった1994年当時、30代前半だった。「伊東さん、東さんと一緒にいろいろ考えさせていただきました。サイン一つ、家具一つまでこだわりを持ってつくることができました」と話す。当時は、公共建築の壁はあったとは言え、自由度が残っていた。柳澤氏にとって

## 伊東 豊雄氏に聞く

さまざまなことを学んだバイブルのような建築であり、「いろいろな意味で伊東豊雄建築設計事務所にとっても公共建築から学んだことの多い作品だったのではないかと思う」と話す。

東永谷地区センターは2階建てで、デイサービスなどの地域ケアプラザを併設する建物。地区センターの中には体育室をメインボリュームに図書コーナー、音楽室、料理室、工芸室、会議室などが配置されている。

翌95年から設計が始まった「せんだいメディアテーク」が、公共建築としての自由度が画期的に高かったこともあって、東



左：伊東氏／右：外観



永谷地区センターの建築がより「窮屈」に感じられたのかもしれないが、先行した同センターの意欲的な考え方はメディアテークに生かされてもいった。

その一つは、伊東氏の真骨頂でもある「壁の少ない建築」だ。せんだいメディアテークは、これを象徴する建築で、透明なガラスで覆われたチューブと呼ばれる構造体が上下階を視覚的につないでいるのはよく知られている。東永谷地区センターにもこの走りのような考え方が見られ、機能の異なる地域ケアプラザを「壁」をつくらないように巧妙につなげた。

伊東氏はこう話す。

「(二つの機能について) 外と中とではっきり分けるようにと言われたので、地区センターとケアプラザの間にコートヤード(中庭)を設けて、(ガラスのファサードとすることで)お互いに見合えるけれども機能的にははっきり分かれている、ということの一つの特徴だと思います」。隣接する2階の図書コーナーと1階のケアプラザがガラス越しにコートヤードを挟む構造になっており、互いに人の動きが見える。

壁の少ない建築というつながる(閉じない)空間はさらに、両施設を天井のアルミルーバーとグレーの床で統一したこと、体育室と図書コーナーをあえて隣



図書コーナーからはガラス越しに体育室が見える

りに配置したことが挙げられる。体育室そのものも閉じない建築を先導しており、ファサードはガラスだ。

スペースがしっかりと確保された図書コーナーからは、ケアプラザとちょうど反対方向にやはりガラス越しで体育室が見える。体育室と図書施設が視覚的につながる建物はほとんどないのではなからうか。静と動がガラスを隔ててつながる。伊東氏は「図書コーナーから見ると体育室は吹き抜けの働きをしているとも言えます」と指摘する。

公共建築について伊東氏はこう述べる。

「最近負けたある自治体のコンペティションなんですけど、調理室と他の部分との境界を割と緩くつくったんですね。そうしたら役所の方から、これだといおいが外にもれてしまうのでまずいんじゃないですかと言われたのですが、ぼくは逆ににおいて

何をつくっているかが感じられた方が交流ができて、コミュニケーションを促進するんじゃないかと思うんです。でも役所の方にはなかなか許していただけなくて。公共建築に立ちはだかる壁の間をすり抜ける回り込み方は、いろいろあるような気がしています。利用者の方は模型を見てもなかなか実感できない部分があって、説明をしても理解が難しいのは当然だと思うんです。いろんな方法で理解をしていただくよう努めていますが、出来上がってみると割とさらっと良いじゃないですか、みたいに言われることも結構あるんですよ」



柳澤氏

## 「壁」の間をすり抜け、閉じない建築



# みなとみらい線馬車道駅

71

2022(令和4)年6月22日掲載

横浜都心部の魅力的なスポットを結ぶ地下鉄「みなとみらい線」。個性あふれる各駅舎のデザインは、土木・都市・建築が融合した画期的なものとして、2004年2月の開業当初から高い評価を得た。その一つ、馬車道駅をデザインした建築家の内藤廣氏は、「これからの駅は街とともにあるべきだ」という、当時の高木文雄横浜高速鉄道社長からの言葉が「強く心に響いた」と振り返る。

68

第3章 横浜を代表する公共建築

## 街とつながり地域の財産に

「それぞれアイデアを出してほしい。自由にプレゼンテーションしてくれ。そういうスタートでしたね」という。東急東横線を延伸する形で横浜駅から元町・中華街駅までを結ぶ、この長さ

4.1kmの鉄道は、地下水位が高く軟弱な地盤に加え、三つの川を横断するため、地中深くを走行する。この地上からの「深さ」を逆手にとって、地下に出現する大空間を周辺の街づくりとも連

携した都市のオープンスペースとして有効活用し、地域の財産となる駅空間を創出していく。その実現に求められたのが、既成概念にとらわれない建築家の豊かな発想と構想力だった。



## 建築家 内藤 廣氏 (内藤廣建築設計事務所代表) に聞く



左：駅中央の円形ドーム／上：内藤氏

内藤氏とともに招聘されたのは、みなとみらい駅が早川邦彦氏、元町・中華街駅は伊東豊雄氏、日本大通り駅が日本鉄道建設公団（現鉄道建設・運輸施設整備支援機構）の安藤恵一氏。計画途中で追加された新高島駅はUG都市建築の山下昌彦氏が担当した。各分野の専門家と市民代表で組織するデザイン委員会に、月1回のペースでそれぞれの地区の特性を考慮した駅空間デザインを提案し、議論を重ねてプランを固めていく。そのプロセスを通じて、初会合での「地元と一緒に駅をつくりたい」という高木社長の言葉は「常に頭の中にあっただ」と語る。

### 歴史を投影し未来を表徴

馬車道は、横浜の発展を担った歴史ある建造物が建ち並ぶ地区と再開発が進む新しい地区との中間に位置する。この場所性を踏まえた「過去と未来の対比と融合」をデザインのメインテーマとした。その最大の特徴がコンコース壁面のレンガだ。

職人が手作業で仕上げた「張りものではない正真正銘のレンガ積み」であり、駅中央に位置する2層吹き抜けのドーム空間には大正以前に広島で焼かれた古レンガが使われている。その陰影ある肌合いはまさに歴史の堆積そのものと言える。

このレンガ壁は、「ほとんど水の中。潜水艦を設計しているみたいなもの」という、極めて高い地下水位に備えた漏水対策の仕上げ壁となる。外殻コンクリートから水が漏れてこないように隙間をあけるなど、レンガの積み方は現代の技術が裏打ちしており、鉄道特有の列車振動にも万全の対策を講じている。直径24m、ドーム中央部での高さが12mという、地下とは思えないダイナミックな円蓋は「過去と未来の融合」を表徴する空間として、GRC（ガラス繊維補強セメント）で天井を形成。音響の専門家である唐澤誠氏との協働により、吸音性能の高いアルミ吸音パネルを取り付けるなど、良好な音環境にも配慮した。

一方で、地下水に備える必要のない内部の柱などはすべてむき出しとした。「これまでの柱は電線や設備の配管などを包み込むことで張りぼてのように断面が大きくなる。このカバーや仕上げ材を剥がすことで、そのコストを函体の漏水対策に回せる」と提案した。防火区画用のシャッターレールも熱押出鋼で

よりコンパクトとし構内やプラットフォームの視認性を高めた。照明や空調の吹出し口などを一つのボックスに収めた新しいシステム天井も導入。プラットフォームに設置したアクリル一体成形による浮遊感ある透明なベンチは、まさに近未来を想起させるものとなっている。

他方、街と連動した「駅の在り方」として、「横浜の歴史が沈潜していくような場所をつくる」ことも提案した。当時、市内で歴史的な建造物が取り壊される際に主要なパーツを保管していると聞いたことがきっかけだった。

「それをレンガ壁に展示し、この地下空間が横浜の記憶をとどめる場所になればいい」と、かつて駅の地上部にあった横浜銀行旧本店別館の金庫扉、貸金庫、階段手すりなどのパーツは東側コンコース壁面に。西側コンコースの壁面は明治から昭和にかけて活躍した建築家・中村順平が手掛けた長さ45mの大壁画『横浜開港史』が行き交う人の目を引く。

「鉄道はやはり安全が第一でデザインはずっと後ろの方にある。だけど街とともになければ滅びるのだと、国鉄総裁も務めた高木さんはそう思ってメッセージを発したのではないか。そういう意味でも馬車道駅はよくできたと思う」と改めて感じている。



# 横浜アリーナ

音楽やスポーツなど数多くの感動や熱狂に包まれてきた「横浜アリーナ」が生まれ変わった。2016年に続いて実施した大規模改修工事が終了、22年8月に新装オープンした。設計・施工を竹中工務店が担当。開業から33年、“ヨコアリ”の新たな歴史が始まった。

## 快適さを追求

竹中工務店は、新築時の設計・施工を担当し、16年と22年の大改修も設計と施工を担った。このうち22年の工事の中心は天井の軽量化で、高所作業が必須。「無事故・無災害で完工すべく、特に安全施工を徹底している」(月岡正則作業所所長)。また「鉄骨トラスの補強工事もあり、当初計画で予定されていた在来の吊り足場を、作業性の良いクイックデッキ(先行床施工式フロア型システム吊り足場)に変更するなど工夫し、タイトな工期に備えた」という。

高所足場作業での安全を徹底するため、VR(仮想現実)ゴーグルを装着した疑似体験の安全教

育も実施し、万全を期した。ウェアラブルカメラを活用した遠隔施工管理も導入、「すごく有効だった」ほか、「BIMで足場モデルをつくり、そこから数量を算出して業務の効率化を図れた」など、新たな取り組みも実施し、成果を上げた。

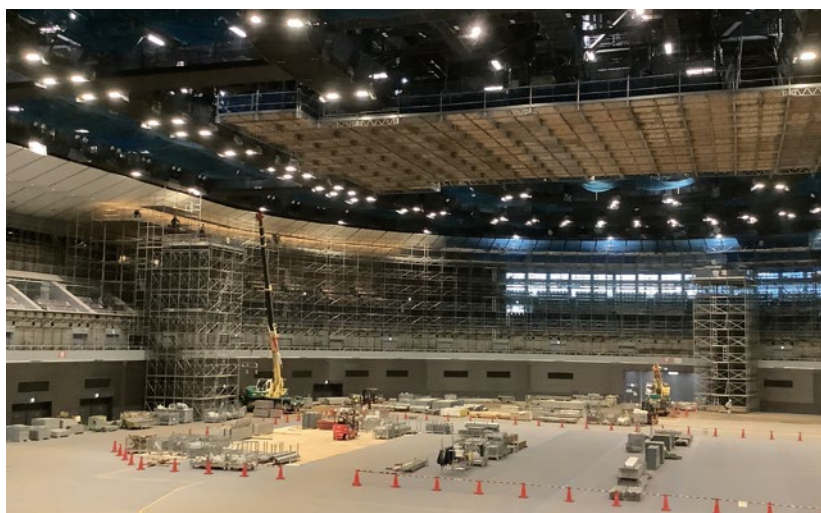
月岡所長を補佐する横浜・湘南地区FMセンターの高橋昭三主管は、前回の16年大改修を現場代理人として采配した。「今回は、前回はなかった構造の工事が中心です。なかでも印象深いのが、新しい他のアリーナに見劣りしないような吊り荷重への強化です」。既存の施設に文字どおり、新たな命を吹き込むようなリノベーションであり、感慨深い様子だ。

設計と監理を担当した東京本

店設計部の松浦勇一主任は、高橋主管と同様に、前回の大改修に続いて今回の工事に臨んでいる。「仕上げ工事のメインは、特定天井を軽量なものに置き換えるものですが、設備機器をスリット部にまとめることで天井はできるだけシンプルにして、より安全性の高いものにするのに一番気を使った」ほか、音響についても「改修することでどのように変わるかシミュレーションし、横浜アリーナさんの要望にできる限り沿う提案ができたと思います」と語る。

また、「横浜アリーナは、現在は音楽イベントが大多数ですが、計画当時はスポーツも含めた多目的の利用をよりはっきりと意図されており、それを念頭に設計されています。例えば搬入口も、いろいろなイベントに対応できるレイアウトがしやすいよう3方向に設けたのではないかと思います。ロビーの動線空間や通路幅など他の類似施設に比べ、ゆとりがありますが、そうしたことも多目的施設としての使いやすさを意識したためと考えられます」という。

多目的ホールの代表格



上：施工中の吊り足場／右：外観



## 音響設備など充実

横浜アリーナが開業以来30年以上、わが国の多目的ホールの代表格であり続けている理由の一つに、音響が良く、設備機器が充実していることがある。加えて、ステージの位置や1万1,000席もの観客席などホール内部の形状を、コンピューター制御で自由自在に変えられる「ラムダシステム」も見逃せない。メインアリーナの床下に収納している可動式客席ユニットを昇降させることで、イベントの企画・演出に合わせてステージ

の位置や観客席を3時間程度で自由にレイアウトできるという優れたもので、使用者に評判のシステムとなっている。

開業以来初となる半年間の休業を伴う16年の大規模改修工事では、誘導サインの更新を主軸としたロビー・トイレの内装、照明器具のLED化、ユニバーサルデザインへの対応、建物外部の歩行者デッキ・正面広場・駐車場の改修などを行った。

また、横浜市は東日本大震災後の基準に合わせた「天井脱落対策事業計画」の中で、横浜アリーナを他の施設などとともに

「災害時に最も重要な拠点」として位置付けており、2回目となった22年の大改修では吊り天井の耐震化、いわゆる特定天井の軽量化を始め、空調設備や屋上防水の更新、外壁補修などを実施した。

横浜アリーナは、イベント会場である半面、災害時には帰宅困難者の一時滞在場所となる公共施設としての顔もあり、大改修により施設の長寿命化が図られ、より安全・安心な施設に生まれ変わった。

## 長寿命化に対応



# 横浜マリンタワー

18

2022 (令和4) 年7月27日掲載

眺望絶佳の大パノラマ

観光名所の山下公園や大さん橋、港の見える丘公園などのゲートとして位置付けられる横浜マリンタワーは、横浜港のシンボルとして60年以上にわたり市民に親しまれてきた。開業は1961年。高さは106m。2009年の大規模再生事業に続き、19年から2年半かけて実施した大規模改修も終了、22年9月にリニューアルオープンした。眺望絶佳の一等地で、来館者にとって2層の展望フロアから眺める360度の大パノラマは必見だ。

## 工期の6割超が仮設工事

09年の改修を工事長として統括した清水建設横浜支店安全環境部の堤俊明氏は「あんなに難しい工事は初めてでした」と施工当時を振り返る。工期11カ月のうち、6割以上の約7カ月を仮設工事に費やしたといえ、その特殊性が分かっていうものである。極端な話、工事、施工のための仮設足場を架設したら先が見えた、と言って過言ではなかった。

工事名称「マリンタワー再生事業改修工事(1工区)」。工事内容は灯台と展望台の内外装改修、鉄塔の耐震補強と塗装などで、「展望室と灯台室は外部サッシ、屋根パネルなどを全面更新」したほか、鉄塔の「上部に鋼材を付け足して補強する、いわゆる耐震補強工事と全面塗り

撮影: 太田拓美

替え工事」を行った。完成後50年近くが経過し、初めての大改修・再生工事であった。

マリインタワーは、下から上に細くなり、その頂上部に灯台室（現在は役目を終えている）と展望室が載る。周りは賑やかで、人や車の往来も多い。工事中は多くの人目の目にさらされ、海の近くのため強風も吹く。それだけに物の落下はもちろん、墜落転落など無事故無災害での施工を徹底し、万全を期した。

というのも、このような工事の場合、一般的には養生を兼ねた枠組み足場やブラケット足場を組み合わせて架設する。しかし、着工前の段階で風の強さや高所作業などを考慮して工程を検討した結果、仮設の資材揚重と架設が工事の大部分を占め、工期を順守するのは厳しかった。大部分の仮設工事が高所や空中での作業となるため、安全確保が大変で作業効率も悪く、コスト増になることも懸念された。

そこで、タワー形状に合わせて3パターンの足場を設置することにした。塔体部分の平面形状変化と傾斜に対応し、昇降できる塗装用「クライミング足場」、展望室のサッシやパネルなどの付け替え作業を安全・安心に、床上で効率よく作業できる「スライド足場」、底部がお椀のような形状の展望室上げ裏改修に、同じく安全で効率よく作業できる「ユニット足場」の採用である。

特にクライミング足場については「上に向かって細くなるのに従って生じる隙間をふさぐため、

足場デッキに横方向に自動で伸縮できるように改造した跳ね出しステージを取り付けて鉄塔の平面形状に対応できるように」し、計4台で外周を取り囲み、耐震補強や改修工事を行った。また、塗装工事での飛散防止にもなる養生シートについても、「強風に耐えられるよう結束部分にワイヤーを入れて強化」するとともに、形状は一般的な長方形ではなく、塔部の形状変化に合わせて覆うことができるよう台形の特注品とし、「工事中もタワーのフォルムそのままの美しくスマートな外形を維持」した。

### エレベーター シャフトを活用

19年——。新装開業に向けて、約10年ぶりに改修することになった。工事名称「横浜マリインタワー改修工事（建築工事）」。施工は渡辺組が担当した。主な工事内容は、塔体部等の鉄部の劣化補修と塗装改修、屋根や外装の防水改修と塗装改修、低層部内装の美装と更新（横浜市資産の共用部）などである。

作業所長を務めた渡辺組の篠田隆信工事部次長は「工事のメインは、塗装をはがして塗り直すというもので、工事内容には特段、目新しいことはないですね」と事もなげに話す。実際の施工は容易ではなかった。除去する塗膜に有害物質のPCB（高濃度ポリ塩化ビフェニル）

が使われており、除去する際に飛散を食い止める必要があった。しかし、屋内などの閉鎖空間なら対処するのはたやすいものの、鉄塔という吹きさらしの骨組みだけの構造で、ましてや高所での除去作業である。飛散する条件はそろっていた。

除去にはまず、塔体を上下方向に5つの区画に分割し、1区画ずつ順繰りに施工した。「1区画は高さ15m。フレームの足場を組んで外周を防音パネルで覆うのですが、それだけでは空気の流れは止まらないので、その中にシートとベニヤで水平区画をつくり、さらに内側をビニールシートで養生して内部を負圧防塵装置で負圧にし、万全の飛散対策を取って作業しました」。1区画につき、フレームを上げるのに3カ月、改修のための棚足場の組み立てに3.5カ月、その解体に3カ月を要した。工期が2年半となった大きな理由に、この仮設工事があった。

もう一つ、記録しておきたい工夫に、材料等の揚重や搬出に既存のエレベーターシャフトを活用したことがある。「提案して、設計変更を認めてもらいました」という。篠田所長は、10年前の低層部・機械棟の改修工事「マリインタワー再生事業改修工事（2工区）」にも参加しており、その時の知識と経験がシャフト活用に活きた。



# 横浜市中央図書館

2021年6月に開業100周年を迎えた横浜市立図書館は、大きな時代変化に対応しながら、1990年代半ばには市内18区すべてに設置されるなど、人と本をつなぎ、生涯の学びを支える場としての役割を果たしてきた。94年に開館した『横浜市中央図書館』は、この図書館ネットワークの中核であり、特徴ある建築空間とデザインは、つながり・ひろがる「知の森」を体現する。その設計意図を前川建築設計事務所の橋本功所長に聞いた。

## 単位空間がつながり・ひろがる「知の森」

横浜市中央図書館は、横浜の繁華街を見下ろす小高い野毛山公園に隣接した敷地に建つ。坂道の登り口から分かれるような傾斜地の複雑な敷地形状にあって、「この土地を見たときに、野毛山公園と街との連携がとても大事であり、この敷地の不定形をどうやって活かすのかをまず検討した」という。

「ある一定のボリュームを持った単位空間が増殖し、あるいは収縮して変化しながら連続していく」という「前川建築」の特徴も活かしながら「この土地に合う増殖の単位は何か」を探り、検討を重ねた結果、導かれたのが「柱を中心に、正三角形を組み合わせた正六角形が隣り

合うことで増殖していく」プランニングだ。全体の佇まいとしても「六角形のボリュームが立ち上がって山なりにつながり広がっていく。野毛山と街の景観に対して一つのリズムを与えることができる造形」をもたらしている。

開館時で約150万冊の蔵書を収容できる、公立では全国有数の規模を誇る大型図書館として、限られた敷地とスペースの中で大規模開架を実現する上でも「単位空間」の考え方は効果を発揮した。人がスムーズに移動できるよう、書架の間隔は1.8mに、柱と柱の間隔は書架6列分となる10.8mにそれぞれ統一。

さらに「図書館の計画では利用者はもちろん、そこで働く人

たちの動線をどれだけ短くできるかが大事」だとして、六角形の単位ユニットを湾曲するように展開し、大空間の閲覧室を確保しながら、光庭を挟んで抱え込む形に事務室を設けることでバックヤードからの移動が容易な効率のいい書架配置を可能とした。

閲覧席も六角形の形を活かして窓側に設置することで、資料と座席の距離をできるだけ縮めると同時に緑豊かな外部環境ともつながる、居心地の良い快適な空間環境を提供している。

図書館には歴史的、

前川建築設計事務所所長 橋本功氏に聞く



撮影：川澄明男



左：野毛山公園と一体となった図書館全景（提供：前川建築設計事務所）／右：橋本所長



撮影：川澄明男

1階エントランスと総合カウンター（提供：前川建築設計事務所）

## 本を守り、本とふれあう

学術的な価値の高い資料や書物も多く保管されている。それだけに空調環境の整備にとどまらず、「建物自体が丈夫で元気でなくてはならない。シンプルイズベストで長持ちする素材を使うのも基本の一つ」と前川建築の流儀の一端を語る。

この図書館では、蔵書を温度や湿度の変化から保護するため、外壁は石張りとし、外断熱で二重壁のオープンジョイント工法を採用した。

「要するに躯体があって断熱材があり、その外側に空気層があって石がある。外気温が上がっても躯体を温めず、室内に対して外気の熱負荷を抑えている。省エネ的にも優れた性能を持っている」ことに加え、水密

性を保持し浸入した水を外部に排水させるため、「よほど大きな災害でもない限り、しっかりとメンテナンスしていけばこの建物の構造体としての鉄筋コンクリートは100年でも200年でも長持ちできる」と自信を込める。

他方、「商業的で劇場化する近年の公共図書館の在り方には率直に疑義を差し挟む。

「ショールーム化も一つのやり方ではあるし、いろいろなバリエーションがあっいい。だが図書館活動の原則は本と人がどうふれ合うかであり、写真映えするからと人が集まり、見に来るものではない。単に本の表紙を見せるのではなく、著者は何を訴え、何を語ろうとしているのかを感じられる、触れること

ができるところに図書館の醍醐味があるはずだ」と。

横浜市中央図書館では、より多くの市民に「本を手にとってもらいたい」との思いを込め、書架の高さを身長150cmの人が一番上の棚に手が届く2065mmに設定した。情報過多社会だからこそ、94年のユネスコ公共図書館宣言にある、「地域において誰もが知る権利を得る窓口」であり「自分の意思で自らの思想性を培い、情報を判断し、それを発信できる礎をつくる」という公共図書館の役割は「今後ますます重要になっていく」と見据える。



# 市民文化会館 関内ホール

1986年に開館した『横浜市市民文化会館関内ホール』は、芸術文化の発信と交流の場として、長く市民に親しまれてきた。築後30年が経過したことを機に大規模改修工事を実施。モダニズム建築の名作を多く世に送り出した建築家、芦原義信の設計による建築の質やオリジナリティーを保持しながら、さまざまなジャンルのエンターテインメントをより快適に楽しめる空間として、2018年9月にリニューアルオープンしている。改修設計を担当した建築家で芦原太郎建築事務所所長の芦原太郎氏に、設計のポイントとともに、モダニズム建築の活用の在り方などを聞いた。

## 街に果たす役割受け継ぎ最適化

横浜の中心市街地として発展してきた関内・馬車道エリア。この開港以来の歴史が息づく街並みに大きく開かれたファサードは、関内ホールの持つ魅力の一つだ。

「街に対する顔をどうつくっていくか、一生懸命考えていたのだと思う。外部空間や街並みについての研究が実作品に実践されている。音響や雰囲気を含めホールもオーソドックスにきちんとできている。公共ホールの優等生だなと感じる」と、その印象を率直に語りつつ、改修に当たっては「いまの時代に、いまの人びと、街にとって最良な答えを

出す」という思いを込めた。

なにより「モダニズムの建築家として機能、ファンクションを重視していたわけだから、僕らも極めてオーソドックスに機能面から次の30年に向けた関内ホールを考えた」とふり返る。

開館以来、初めての長期休館を伴った大規模改修工事では、災害拠点施設としての機能を担保するため、大小ホールとエントランスの特定天井耐震化改修を中心に、施設全体の長寿命化対策として設備インフラを全面更新。さらに天井改修に合わせて大ホールの音響計画や舞台機構も更新するとともに、ホール客席を含め内外装をリデザインした。

特に音響は「ホールにとって一番大事なこと」であり、「関内ホールはもともと音響の評判も良かったが、どうせ天井を変えるのなら地震対策だけでなく、より良い音になる天井にしよう」と永田音響設計と協働して最適解を求めた。

ホール客席も「座席幅を広げ、椅子自体もグレードアップした。中央ブロックは千鳥配置に変更し、より気持ちよく見えるようにしている」など、安全で快適に鑑賞できる環境を整えた。客席の色は「馬車道の赤レンガをイメージしたエンジ色に近い赤」に大胆に変更し、「ハレの場」としての高揚感も演出している。

ファサードの雁行するミラーガラスの壁面は、街路樹からの木漏れ日をイメージさせる白のアルミのデザインパネルを西側に1面ずつ取り付けることで日射を遮へいしながら変化のある表情を見せている。エントランスの床仕上げも既存のレンガタイルから白を基調とした石張りに更新することで明るく来場者を迎え入れる空間とした。

一貫するのは「意匠的な部分や空間の持つ

建築家 芦原太郎氏（芦原太郎建築事務所所長）に聞く



芦原氏

質、オリジナルなものは尊重し、きちんと活かしながら、性能はより良いものにしていく」姿勢であり、「父の意識にあったのは、横浜の市民の、街の、都市のために役に立つ建築を一生懸命つくっていくという思いではないのか。その役割をいまの時代にできるだけうまく果たしていくために改修していく」という、受け継がれる思いだ。

他方、「父の時代は手描き図面。これをすべてCADデータで書き起こすという、設計の前段での図面のCAD化には苦労した」と苦笑しつつ、「そのCADデータをベースに、ファシリティマネジメントを展開していけば、いずれまた来る設備更新への対応をはじめ、維持管理の効率、能率を上げることにつながるのではないかと提起する。



上：外観／下：大ホール

パリの街がそうであるように、「都市の魅力を形成するには100年以上、200年、あるいは300年というスケールで時間を積み重ねていくことが大事になる」とした上で、「いまの時代の『いいね』を建築の形にして次の時代に引き渡す。受け継いだ

方はその時代、時代で工夫していく。要は長い時間をどうやって継続させるか。ダイナミックな発想の転換をしながら、建築やインフラをうまく使いこなすか、その使い方の知恵を社会なり街が持つ必要がある」と強調する。

## 時を重ね使いこなす知恵を





# 三溪園

「日本の歴史的な建築の理想郷のようなところ」。建築史家、建築家の藤森照信氏は、横浜市中区の「三溪園」をそのように表現する。大好きな場所の一つだ。明治から昭和にかけて活躍した実業家・原三溪が、日本の古建築を京都や鎌倉などから移築し、広大な敷地に巧みに配置した日本庭園である。国の重要文化財が10棟ある。京都・燈明寺から移された室町時代の建築・旧燈明寺三重塔をランドマークとする外苑、藤森氏が「全身数寄屋造り」と評価する「臨春閣」を景観の中心とする内苑で構成される。その臨春閣が2022年、5年にわたる大修理を終えた。内部からの庭園の眺めも考えられた臨春閣で、藤森氏に三溪園の魅力などを聞いた。

## 歴史的な建築の理想郷

三溪園は17万5000㎡もの広大な敷地に、古くは室町時代にさかのぼり桃山時代を経て、江戸時代を中心とする古建築を移築した。京都の二条城内で江戸時代に建てられたといわれる「聴秋閣」を1922年に移築して全体が完成。2022年で完成100周年を迎えた。最初の移築は1905年、豊臣秀吉が桃山時代に建てた「旧天瑞寺寿塔覆堂」。三溪はその後、桃山時代にゆかりの建築や美術品を蒐集（しゅうしゅう）していったという。藤森氏はこう話す。

「庭園を歩くと一見京都のような感覚を持つかもしれない。でも、京都にもこれだけ歴史的な名建築が集まっている所はない。日本ではここだけだと思う。原三溪さんは自分の好みで集めたのだが、非常に趣味が良くて、洗練されている。日本の歴史的な建築の理想郷のようなところだと思う」

建築史家にとって見どころが満載の庭園だが、中でも藤森氏が大好きなのが「聴秋閣」だという。聴秋閣は、徳川家光の上洛に際し、1623年に二条城内に

建てられたと伝えられるもので、書院造りで茶亭の建築である。のちに家光の乳母であった春日局に与えられたという。入り口が一段低くなっているのが特徴で、これは水辺から舟で直接上がり込むための空間で、舟遊びを意識したものであったことが想像されると三溪園の公式ホームページに説明されている。

「御座船という大名や将軍が乗る屋形船があるが、建物を実際に見たときにそのような船を意識したのだというのは本当だったのだと思った」

## 建築史家・建築家・東京都江戸東京博物館館長 藤森 照信氏に聞く



左：臨春閣は11年かけて念入りに配置が考えられ、池に面して三つの棟を奥にずらしながら連結させた／右：藤森氏

御座船を思わせる「聴秋閣」に魅了されて

意匠は、幕府の造営などに関わる作事方を務め、茶人でもあった佐久間将監によるといわれ、三つの屋根を組み合わせた外観から移築前は三笠閣と呼ばれていた。三溪はこれを聴秋閣と改め、周辺を秋に紅葉を楽しむ風情とした。

内苑の中心である臨春閣は、歴史上ほとんど残っていない貴重な数寄屋造りの建築だ。

「日本の住宅は寝殿造りがあって、それが発達して書院造りになって、書院造りができた時点で千利休が茶室をつくる。それで、書院造りが茶室の影響を受けて数寄屋造りが生まれた。江戸時代には書院造り、数寄屋造り、茶室の三つが併存して、基本的にはそのまま現代につながっている。茶室や書院造りは情報があって成立過程は分かっているが、数寄屋造りは現存する建物が初期のものとして桂離宮だけで、その後がずっとなく、途中にこの臨春閣があるくらい。それほど歴史は古くないけれど、どう成立したかよく分からない。数寄屋造りは無駄なものをそぎ落としてシンプルに薄く、細くつくるもので、火にも弱いから管理が大変でなかなか残らなかった。この臨春閣は、どこにも長押（なげし）が回っていないことから、まさに『全身数寄屋造り』といえる貴重な建



藤森氏が一番好きだという「聴秋閣」

物になる」

数寄屋造りは歴史の文脈で見るとは好きだが、自分自身が建築家として数寄屋の美学で設計をすることはないだろうと話す。「（設計しないのは）数寄屋造りは、畳割ということもあってほぼ完成している様式なので、何か新しいことをやろうと思って難しいから。（ドイツの建築家の）グロピウスが初めて桂離宮を見たとき、コルビュジエに手紙を書いて、『自分たちのやろうとしていたことは既にここでやられている』という内容だった。数寄屋造りはそれほど完成した建築だった」

臨春閣の配置については「入り口から順に見ていくと一本の軸を通す視線を持ちながら、随所で崩していくことを意識した

ことが分かって、さすがだなと思った。古美術が好きで書画をたしなんだ三溪にとって、庭の造形はあえて勉強はしなくても大体理解できていたのではないかと思う。庭づくりの原則は、石庭とは違って浄土庭園といって極楽をイメージしている。阿弥陀如来がどこかに置いてある感じがあって、三溪園もそれをわきまえてやっておられる」と述べる。

自然や文化が地域や国の誇りを象徴するのだと言う。

「その国、その地域に暮らす人は自分たちの場所、生きている時代に誇りを持つということがとても大事なこと。その誇りを象徴するのが自然や文化だ。三溪園はまさに地域にとっての象徴。誇りをつないでいく場として大事な働きをしている」



# 西谷浄水場

## (旧整水室上屋、旧浄水井上屋、旧配水井上屋)

日本の近代水道発祥の地・横浜。初めて給水を開始した1887年、水栓からほとぼしる水に市民は驚嘆した。その28年後の1915年3月、横浜市のほぼ中央に位置する保土ヶ谷区の高台に、西谷浄水場は誕生した。ここには、横浜に数ある有名近代建築に引けをとらない、赤レンガの小さな建屋が6棟、凜と佇んでいる。何のためにつくられ、今後どのように保存されていくのか、現地を訪ねた。



1997年に四角形、八角形の建屋ともに国の有形文化財に登録された

### 赤レンガの小さな文化財

浄水処理施設の中央部に、四角形の四つの建屋、八角形の二つの建屋が整然と立ち並ぶ。四角形の建屋は元々、ろ過池の整水室として整備された。当初室内にはバルブがあり、ろ過する水の量を調整する役割を果たしていた。

当時は、現在主流の薬品を利用して水をきれいにする急速ろ過ではなく、微生物の力を使う緩速ろ過を採用しており、この方式では急速ろ過池に比べて広大な敷地が必要で、当初はろ過池が八つあった。

整水室も同数備えていたが、

1973年の改修工事により緩速ろ過池と整水室は機能を停止。工事に伴い整水室4棟は解体したものの、東側の4棟は現地で保存し、97年には八角形2棟の建屋とともに国の有形文化財に登録された。





## 関東大震災前の希少なレンガ造

銅板葺き平屋建ての整水室は、赤レンガを基調に花崗岩のラインが入った建築デザインで、1914年12月に開業した辰野金吾設計の東京駅丸の内駅舎や17年7月開館の横浜市開港記念会館を彷彿とさせる。

現在の銅板屋根は緑青色だが、当初は鮮やかな赤褐色だった。室内は漆喰塗りで、中央の照明器具取り付け口は陶磁器となっている。

一方、八角形の建屋は1号配水池（現在は休止）の脇に1棟ずつ設けられた。ここにもバルブがあり、配水池に出入りする水の量を調節していた。形状が八角形となっていること以外は、外観、内観ともに整水室と同様の造りとなっている。

どうして浄水施設の建築が、ここまで凝ったつくりになっているのか。「横浜市水道第二拡張誌」（1919年）には「場内ノ美観ヲ添ウル為メ其上部ニ煉瓦及ヒ花崗岩ヲ以テ上屋ヲ築造シタ」

と特長を表す文章が残っている。これを見ると、建設当時から場内の美観を意識して浄水場を整備していたことがわかる。

西谷浄水場の再整備（2032年工事完了見込み）により、現存する四角形、八角形の6棟は敷地内の別位置に曳家工法で移設される。「関東大震災前の希少なレンガ造」、かつての浄水場の水の流れを示す「配置」、浄水場らしいのびやかな「景観」の三つの価値があるため、移設時には極力既存の配置や向きに配慮した形で残すという。滑車などの使用に伴う振動で損傷ないように、基礎補強した上で、細心の注意を払いながら移設する。

1号配水池管廊（地下通路）の出入り口となっている坑門も特長的だ。外観はユーゲント・シュティル様式というドイツ風の様式を模しており、建設当時は装飾が施されていたことが見て取れる。

配水池の内部は二つに分かれており、その間には通路がある。通路への出入り口が坑門だ。現在この配水池は耐震性不足などのため使われておらず、中に入ることはできない。再整備により解体し、跡地はる過池となる。配水池の解体に伴いこの坑門も撤去するが、現在、保存の方向性を検討している。

建設当時から美観を意識



四角形、八角形の建屋ともに形状以外は外観・内観同様のつくりとなっている



# 横浜港大さん橋 国際客船ターミナル

69

2022 (令和4) 年10月5日掲載

82

第3章 横浜を代表する公共建築

日本の海の玄関として世界各国のクルーズ船が寄港する「横浜港大さん橋国際客船ターミナル」。その設計者を選定する国際コンペで世界41カ国、660の応募作品の中から最優秀作品に選ばれた英国在住の建築家、アレハンドロ・ザエラ・ポロ氏とファッシド・ムサヴィ氏による建築家ユニットfoa (foreign office architects) 案は、コンピューターを媒介とした、従来の建築の概念を覆すような斬新なデザインが世界の建築界に衝撃を与えた。

折り紙を想起させる架橋のホール内部 (提供: 横浜市港湾局)

## 「見たことのない空間」実現へ若き才能集結

「他のコンペ案とは全然違う。foa案を見て衝撃を受けた」。コンペの審査結果が発表された1995年当時、京大大学院生だった岸川謙介氏 (京都精華大教授・akk代表)、早大大学院生でコンペにも参加した田村圭介氏 (昭和女子大教授) と小林泉氏 (パワーアーキテクト代表) は、

そう口をそろえる。これをきっかけに3人とも渡欧を決意。大学院修了後、岸川氏と小林氏は英国のAAスクールとUCL (ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン)、田村氏はオランダのベルラーヘ・インスティトゥートにそれぞれ留学した。直接師事した岸川氏をはじめ、3人ともポロ、ムサヴィ両氏に学ぶ機会を得ながら、ヨーロッパの建築プロジェクトに携わっていく。

転機は99年。それぞれが次のステップに向けて日本への帰国を考え始めていた時に、コンペ後は基本設計段階でとどまっていた「横浜」が動く。「興味があったらチームに加われ」というポロ氏の呼び掛けに呼応し、同年9月1日、東京・芝浦に開設したfoaの日本オフィスで実施設計がスタートを切った。



当時、foaに設計協力していた現代建築研究所に勤務し、後に管理技術者としてfoaメンバーに合流した永山智文氏（横浜市建築局施設整備課担当係長）は、コンペ後にfoaと現代建築研究所、それに構造設計集団〈SDG〉と森村設計も加わった設計チームがコンペ案の実現性を高めるスタディーを際限なく重ね、基本設計を練り直す姿を間近に見てきた。

一方、当時からロンドン事務所に在籍し、意匠全般を担当した松澤憲一氏（楠山設計設計部係長）は、特に構造をめぐる議論について、「SDGの渡辺邦夫さんは、構造はスペースフレームにして上面と下面に仕上げをし、コンペのイメージ、つるつとした空間を推していた。けれど、アレハンドロとファッシドは建物全体の形状がカードボード構造と入れ子状になることにこだわった」と語る。そして、ついにコンペとはやや異なるカードボード構造の下面を無くして、折板構造を露出するという決断に至る。「二人がコンペのイメージよりコンセプトを重視したのは驚きました。竣工時にはコンペとの違いに批判があったけれど、素晴らしい判断だったと思う」と振り返る。

2000年3月に着工を迎えたが、基礎工事と並行して上屋の詳細検討を進める「力業」だった。埋立地の建設地では地中25～56mの深さまで合計485本の鋼管杭を打設。その上に強固な基礎構造を構築した。建物の長

さは約450m。まさに「港湾工事、土木のスケール」だった現場で「建築」を実感したのは上屋のメインフレームとなるボックスガーダーの設置が始まってからという。「海上輸送された最初のワンピースがクレーンで船から吊り降ろされた時はものすごく感動した。やっと形が見えた瞬間だった」と永山氏は語る。

田村氏は現場を訪れた建築家のレム・コールハース氏を案内した時に「こんな建物は世界中で見たことがない」と言われたことを鮮明に覚えている。一方で「最先端の建築と思っていたが、ガーダーが並んできた時にエッフェル塔が横になったような前近代的な感じがあってショックを覚えた」とも。

岸川氏も「3Dは使っていたが、やっていることはけっこうローテクで折板の形もすべて手作業で描いていた。アルゴリズムやプログラミングの前段階だった」と指摘する。

「動線の設定が変わると3D

モデルもすべて変更となる。ガーダー1列全部、折板もすべて作り直しなければいけない。やりながら考え、発見していく。その連続だった」とは小林氏の弁だ。

竣工を迎えた時、田村氏は「最先端と思っていたものが実は優しい建築だと感じられて幸せな気分になった」という。「ここに来る人はみんな笑顔で、戻っていく時も笑顔になっている。それがうれしく誇りにも思う」と永山氏。岸川、小林両氏は「ここに携わったみんながこれは俺がつくったと自慢できるような、そういう思いを共有していることがうれしい」と口をそろえる。

かつて自らが学生時代に代々木体育館を見て感じたように、竣工から20年を経て、いま若い学生が「大さん橋」を見て建築の道を志すきっかけになっていることに大きな喜びも感じている。



左から永山氏、小林氏、松澤氏、岸川氏、田村氏



# 横浜国際総合競技場 (日産スタジアム)

60

2022 (令和4) 年11月2日掲載



全景。増水時、地上レベルは遊水地となる

命名権による「日産スタジアム」の愛称で親しまれている横浜国際総合競技場は、国内最大級の観客席7万2,077席を誇る。建設着手は1994年1月で、97年10月に竣工し、翌98年3月に供用開始した。各種競技のほか、コンサートなど幅広く活用されており、中でもスポーツイベントでは国内大会はもとより、国際大会も数多く開催されている。

この競技場の最大の特徴は、ピロティ形式にある。いわゆる高床式で、施設全体が1,000本以上の柱に支えられた人工地盤の上に造られている。高床式の理由は、鶴見川多目的遊水地内に建設されているためで、増水などで遊水地に水をため込んでもスタジアムが利用できるよう工夫されている。

スタジアムの形状は方円形で、地上7階建て。1階（階高約8.1m）は遊水地機能を兼ねた駐車場で、2階部分にフィールドが設けられ、その全周に大屋根で覆われた2層式の観客スタンド（4-7階）が配置されている。また、スタンドの下には業務関連や競技関連諸室、店舗、コンコースなどのほか、診療所や

運動施設などを備える横浜市スポーツ医科学センター、スポーツコミュニティプラザ（日産ウォーターパーク）も開設されている。

## 地震に強い PCaPC造

建設に当たっては、まず深さ約25mにある支持地盤まで現



制振鋼板とし、軒天下にはアルミ吸音材、開口部には遮音壁を設置。照明はLED化され、フィールド照明は隣接のメディカルゾーンに影響を及ぼさないよう屋根の下に配置されているのを始め、建物外周コンコース照明もさまざまな色で彩られるようになっている。さらに、水再生センターから下水再生水を引き入れトイレ洗浄水等に利用しているほか、雨水も散水利用しており、案内や誘導などの各種サイン、120基設置のデジタルサインージ、先進の音響設備などソフト対応も充実している。

横浜国際総合競技場は、東京2020オリンピック競技大会でサッカー男女の決勝戦が行われたことにより世界で初めて、3大スポーツイベントといわれる「FIFAワールドカップ」「ラグビーワールドカップ」「オリンピック競技大会」の決勝戦会場になった。

地震力で設計しているほか、屋根やフィールドの架構も入念な耐震対応を図っている。

## 先進性を確保

この競技場は、構想・建設時から国際Aマッチ競技の開催はもとより、各種イベントに対応した空間構成と設備を備えた最上級スタジアムとして整備されており、そのための先進技術や最新設備などを導入、また更新を含め先進性の確保に余念はない。

例えば、全天候型のトラックは日本陸連第1種公認および国際陸連クラス2認証で、特にサッカー競技などで重要になる芝生については、夏芝と冬芝を併用して1年中美しいフィールドをつくっているが、人工地盤で地温の変動が大きいと、芝の養生を考慮してフィールド下30cmの土の中に温度調節ができる温水パイプが敷設され、最適な状態が保たれるようになっている。

スタンド全周に架設している屋根は騒音や照明光を遮る

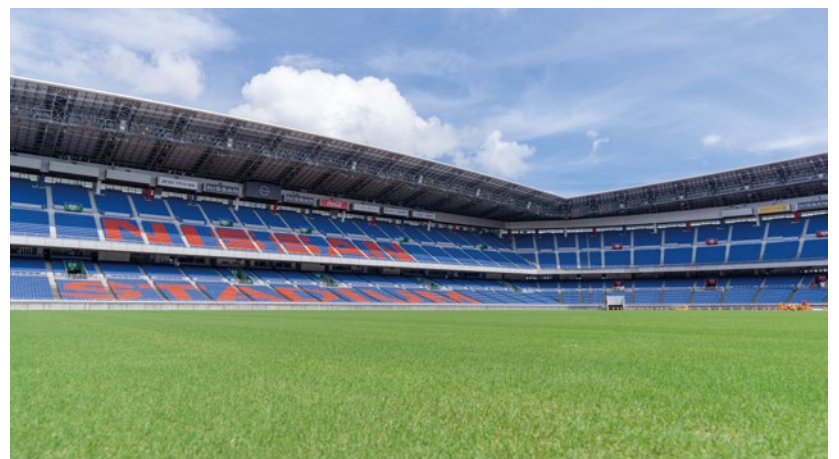
場造成杭を築造し、その基礎の上にプレキャスト・プレストレストコンクリート(PCaPC)造で躯体の骨組み(柱、梁)を構築。具体的には、鉄筋コンクリート(RC)造の柱と梁を工場でプレキャスト(PCa)化し、うち柱は現場でプレストレス(圧縮応力)を加えて建て込み、梁については工場で、1次ケーブルでプレストレスを与えて現場に持ち込み、建て込んだ柱のコーベル(持ち送り)の上に単純支持させる。そして、その後、柱と梁を圧着ケーブル(2次ケーブル)により、さらにプレストレスをかけて圧着させている。

地震に強いのが特徴で、PCaPC造を採用した利点として他に①施工中や完成後の冠水対策として有効②工程管理がしやすい③高品質で高強度コンクリートによる品質確保が可能④鉄骨造に比べ経済性が高い⑤工事車両を少なくできて大気汚染対策につながる⑥型枠合板ではなく繰り返し利用できる鋼

## 千本以上の柱が支える高床式

製の型枠の採用で、森林破壊や産業廃棄物の発生を抑える——などがある。

スタンドの架構でもスタンド下にコンコースなどを設けたため、コンクリート壁や筋交いなどは採用せず、柱と梁による骨組みで耐震性を確保。安全性は万全で、横浜市条例に則り建築基準法に基づく地震係数をさらに1.25倍した



フィールド(提供:(公財)横浜市スポーツ協会)



「ぶんたい」の愛称で親しまれた横浜文化体育館が、横浜市の横浜文化体育館再整備事業で生まれ変わろうとしている。中核施設となるのが、メインアリーナ「横浜BUNTAI」とサブアリーナ「横浜武道館」で、うち横浜武道館は開館し、各種武道やバスケットボール、フットサル、体操、卓球、プロレスなどの会場として利用されている。斬新な意匠をまとった横浜BUNTAIは2024年4月の開館に向けて建設中で、完成すると横浜の新たな名所の一つになること請け合いだ。設計意図などを梓設計の永廣正邦専務執行役員プリンシパルアーキテクト、石成雅人チーフアーキテクトの両氏に語ってもらった。

## キーワードは「人・文化・まち」

設計に際しては、「地域に何を提案できるか」「地域に何が求められているか」など、まずはまちの課題を整理し、構想をスタートしました。それに基づき「人・文化・まち」の三つのキーワードを抽出し、それぞれを「つなぐ場」として施設コンセプトを掲げました。「人・文化」では集客力・発信力・コミュニティ、「まち」ではにぎわいと回遊性を生みだすこ

とを施設づくりのポイントとしました。市庁舎跡地などの周辺エリアの開発が進んでいますが、本事業は関内と関外地区をつなぐ中核施設となることも目指しています。

具体的には、市民利用はもとより、大規模な大会やコンサートなどの興行にも対応した施設整備により、スポーツ振興やさまざまなエンターテインメントの拠

点として、にぎわい創出・地域の活性化につなげていきたいと考えています。

## 視覚差でモアレを起こす

横浜BUNTAIの建設は、24年の開館に向けて急ピッチで進んでいます。建築コンセプトである、まず、まちづくりの象徴として交流と集客を生む「シンボリックアリーナ」とすべく、みなと大通りに



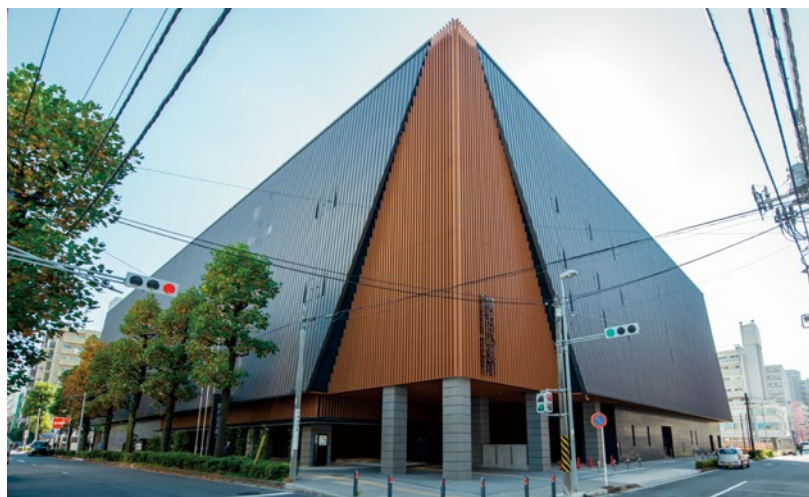
面した建物の風景を重視し、横浜らしい浜風になびく帆をイメージした唯一無二の外観としました。

具体的には、2枚の外装スキン（外側はアルミ板に80mmの穴を14cm間隔で開け、内側は壁面に塗装された黒いドット模様）により生じる視野差で揺らぎ、いわゆるモアレによる印象的な風景を演出したいと考えています。

港町ならではの特徴的な外観は、季節に合わせたライトアップによるこだわりの夜景と相まって、横浜の新景観が創出できればと思っています。

## 大型ビジョン 3面分を横長に

多彩な興奮と感動を生む「ハイパフォーマンスアリーナ」を実現する仕掛けの一つとして、壁面型大型ビジョン3面分（9:48）を横長に設置します。さらに、客



横浜武道館

席はステージを囲む扇形に配置し、いわゆる3方向からステージを見る劇場型アリーナとなりますが、可変性も考慮しており、演出面でも大きな威力を発揮します。さらに、これにより多様な興行に対応する「エンターテインメントアリーナ」、変化するまち・人のニーズへの対応、運用の自由度を高める「フレキシブルアリーナ」を具現化したいと思います。

横浜BUNTAIは地上3階建て。1階はアリーナ階で、2階のメインは観客席となっています。3階はVVIP・VIP席（7室）などのプレミアムゾーンです。2階はロビーとラウンジのほか、体育室も配置します。また、3階のVVIP・VIPゾーンにはボックス席やカウンター席が設けられ、スナッキング（ゲームをつまみにそれぞれの観戦スタイルで飲食）できるホスピタリティあふれる観戦環境をつくります。また2、3階レベルでは、飲食のサプライも可能な民間収益施設との連絡動線によ

## 横浜市初の武道館

りサービスの連携を図ります。

横浜武道館は、本格的な武道場を備えた横浜市初の武道館として市民の武道やスポーツ振興などを図る目的で横浜総合高校の移転跡地に建設されました。20年7月から開館しており、名称にちなみ各種の武道大会をはじめ、さまざまなスポーツ大会等に利用されています。

設計では、横浜の武道の聖地として“ぶんたい”の精神性を継承すべく構想しました。デザイン的には、外観は切り立った屋根とし、その間に和の奥行きを導き出す、アルミに木目のプリントを施したルーバーを設置しています。また、環境面でも最大限配慮しています。太陽光などの再生エネルギーの活用や省エネルギー機器の積極活用により、CASBEE横浜で最高のSランクを取得しています。



横浜BUNTAIの外観イメージ（提供：YOKOHAMA文体）（設計中のため、建物の外観デザインは変更になる場合がある）





明治末期から1世紀を超える時を刻み、その時代の要請に応じた役割を果たしてきた『横浜赤レンガ倉庫』。明治期を代表する建築家、妻木頼黄が設計したこの歴史的な建物は、「港の賑わいと文化を創造する空間」をコンセプトに文化・商業施設として再生され、2002年の開業以来、累計1億1000万人以上が来場する横浜を代表する観光スポットとなっている。改修設計を担当した建築家の新居千秋氏（新居千秋都市建築設計代表）は、「この空間にしかない『気』を読み、次代に残していくこと」が重要だったと強調する。

© YOKOHAMA RED BRICK WAREHOUSE

2棟間広場（全景）

## 近代100年の夢 現代の技術で表現

このプロジェクトは明治時代の建築家、妻木頼黄設計による組積造建築の完成形といえる赤レンガ倉庫を、保存を超えて積極的に活用して保全していくもの。ただ活用方針が定まる前に外観主体の保存工事として構造補強と屋根改修が完了しており、電気やガス、空調のスペースも階段もなく、文化施設や商業

施設としては建築基準法、消防法に適合しない危険な状態でのスタートとなった。

このため、「フランスのオルセー美術館のように用途に合わせて内部をかなり改修する方法をとった」と振り返りつつ、「保存や保全を考えると大きなことは、その建物や場所の『気』だ。建築史家クリスチャン・ノル

ベルグ＝シュルツ言うところの『ゲニウス・ロキ＝その場所に集まり来たるもの』であり、それによって発せられる気を読まなければいけない」と指摘する。

官民のパートナーシップによる事業体制を敷いたのもこの事業の特徴の一つ。国から土地・建物を取得した横浜市から、第三セクターの横浜みなとみらい

## 官民のインタラクティブな関係築く

21が1、2号棟を賃貸借するとともに2棟間広場の管理を受託。1号棟は横浜市芸術文化振興財団が文化事業を運営し、2号棟は事業者公募で選ばれた麒麟ビール、サッポロビール、ニユートーキヨーが出資する横浜赤レンガが商業施設のテナント運営を行う。この複雑な事業フレームを総合的にコーディネートし、インタラクティブな関係をつくり上げる媒介となったのが新居千秋都市建築設計だ。

施設の設計監理に加え、全体計画のファシリテーターとして官民さまざまな組織との調整役を担った。さらには2号棟での商業施設のコンセプトづくりとデザインガイドライン、内装設計指針の作成によるテナントデザインコントロールなども主導した。

「キング・クイーン・ジャックの横浜三塔に対して、赤レンガ倉庫はジョーカー。当時ほとんどの人が成功するとは思ってなかった」という。それでも「赤レンガ倉庫の持つ力を信じてい

た横浜みなとみらい21の若竹馨氏ら、横浜赤レンガの村澤彰氏、杉一郎氏らと私たちは、TRIVE（TRY+LIVE=挑戦と躍動）を合い言葉に、大人の街をつくるために商業コンサルタントを使わず、独自のチームをつくりから取り組み試行錯誤を重ねた。そのチームを献身的に支えたのが竹中工務店の山田健夫氏、中嶋徹氏らだった」。

テナントを含め、多様な主体が関わるだけに「全体構想をつくるには、それを一つにまとめるストーリーが必要」とも指摘。

「この赤レンガ倉庫が生まれた時代である『ファーストマシンエイジ』」を1号棟、2号棟共通のデザインコードとしたことを、「人間の努力や挑戦が目に見えた時代、機械への憧れ、未来への夢が語られた、その時代の精神や時代感覚を、現代の技術を使ってよみがえらせ、継承することで他に類を見ない空間づくりを目指そうと考えた」と説明する。横浜赤レンガ倉庫は「ファーストマシンエイジのスピリッツが



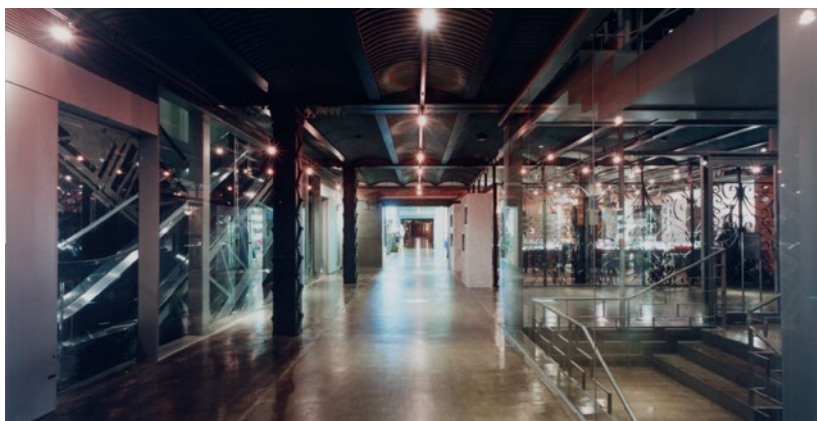
新居氏

積み込まれたタイムシッ  
プ」だとも。

「歴史的建造物を現代によみがえらせるためには空間イメージを共有することが重要」として、赤レンガ倉庫の空間づくりには「脚本（スクリプト）を作って、言葉と図によって空間イメージを共有化していく」方法論である「デザイン・スクリプト」の考えも導入した。

本物の価値をいかに残し、活用に必要な機能をいかに新設するか明確に示し、新旧の調和が細部にわたって緻密に計られた完成度の高い建物・インテリアを実現。日本建築学会賞（業績）、ユネスコ文化遺産保全のためのアジア太平洋遺産賞を受賞するなど、国内外から高い評価を得ている。

## 建築家新居千秋氏（新居千秋都市建築設計代表）に聞く



2号棟内部



# 外交官の家

明治から大正にかけて世界中を飛び回った外交官・内田定植の邸宅が、東京都渋谷区南平台から横浜市の山手地区に移築復原されてから2022年で25周年を迎えた。新築時から数えて110年以上経ったいまなお、『外交官の家』として残り続けている背景には、定植の孫・宮入久子さんの「この家を残したい」という強い思いと、その思いに共鳴した人たちの奮闘があった。久子さんの長男・宮入康夫さんと三男・昭彦さんに、内田邸がたどってきた歴史と移築復原の過程を聞いた。

## 空襲の難を逃れ避難所に

内田定植邸は洋館と和館併設の住宅で、明治政府の外交官だった定植の自邸として、米国人建築家・J・M・ガーディナーの設計により1910年に建設された。太平洋戦争末期の45年、本土空襲で焼夷弾のおもりが洋館の屋根を貫き、2階浴室が破壊されたが、焼夷剤（出火させる薬剤）は周囲に飛び散り、内田邸は難を逃れた。一方、周囲の住宅は焼夷剤による火事で辺り一面焼け野原になったという。

この時、定植の長男一家と周囲の人たちは何とか内田邸を守ろうと、火が燃え移らないように内田邸敷地内の井戸から水を汲み、消火活動に当たった。「この影響で井戸の水が枯れてしまっ

たと言われている」（康夫さん）という逸話が残るほど、当時からこの家は人々にとって“守りたい”と思わせる特別な存在だった。多くの人の手により、燃えずに残った内田邸は、避難所として火災で家を失った周辺の人を受け入れた。

59年には進駐軍が接收時に行った工事が原因で漏電し、ボヤ騒ぎも発生。現在でも、3階には焼け焦げた跡が残っている。たび重なる危機に遭遇しながらもその姿は残り続け、内田から久子さんら子孫へと受け継がれていく。康夫さんと昭彦さんも、南平台に建っていた時代、この家で暮らしていた。

昭彦さんは、この家に遊びに

来る友人は「洋館を特別なもののように感じていたようだ」と振り返る。写真家・篠山紀信氏もこの住宅に魅力を感じていた一人だ。1階のサンルームを気に入り、撮影スタジオとしてたびたび使っていた。吉永小百合さんや天地真理さんなどが撮影に訪れた際は、「授業をサボって見学に来ていた」と康夫さん。

この時代にも建物内ではアクシデントが発生していた。昭彦さんが高校生のとき、2階の自室の勉強机に向かって漆喰の天井が落ちてきた。「爆撃を食らったようなものすごい音がして親が飛んできたが、奇跡的に直撃を免れた」と昭彦さんは回想する。白いほこりで目の前が真っ白な状態だったといい、衝撃の大きさを物語る。

幾度もの危機に遭いながらも、幸いなことに誰一人けが人は出なかった。「大きい台風が来る際は、それに備えて工務店に徹夜で常駐してもらった」（昭彦さん）など、家を守ることが生活の一部となり、暮らし続けること

## 篠山紀信氏もお気に入りの場所



左：右から康夫さん、昭彦さん／右：1階室内







で家を守り続けた。

「この家を残し続けたい」。内田邸を守り続けることは、久子さんの悲願だった。久子さんを揺り動かしたのは、祖母・陽子との絆にあるという。

康夫さんは「母は陽子さんに大変かわいがってもらっていたため、祖母のためにもこの家を守りたいと感じていたのでは」と話す。久子さんは賃貸や当初洋館に併設されていた和館を取り壊して駐車場として活用するなどさまざまな工夫をし、建物の維持に努めていた。しかし、そうした努力も限界に達する。

建物保存の道を探るため、関係各所に働きかけたが、なかなか思うようには進まなかった。そんな時、雑誌の企画でまち歩きをしていた当時法政大教授で建築史家の陣内秀信氏が偶

然内田邸を見つけたところから、保存への歯車が動き出す。

この住宅に興味を示して見入っていた陣内氏に久子さんが声を掛ける。「母は陣内さんに『残したいのです』という話をしたそうです。そうすると陣内さんが『それでは私が一肌脱ぎましょう』と言ってくれた」と康夫さんは語る。

その後、陣内氏の仲介で建物本体を寄付する要望書を横浜市に提出。市は検討の結果、久子さんの要望どおり、建物を受け入れることに決めた。

移築復原に当たっては、建物に改造が加えられていたため、創建時が本来の姿と決め、外交官の当時の生活空間を再現することにした。工事は大きく前半

の久子さんによる解体工事と後半の市による組み立て工事に分かれる。

解体は94年に実施。昭彦さんは「部材の一つひとつに番号を振り、ひたすら束ねていく作業で、とてつもなく大変だった」と回顧する。95年から97年にかけて実施した復原工事では「束ねていたパーツを全部元と同じように、順番どおりに戻していった」

康夫さんは「移築復原に携わったすべての人の何か一つでも欠けていたら、この家はなくなっていたはず。たくさんの奇跡が重なってこうして残った。いまこの場所にたくさんの人が見に来てくれるのはとてもうれしい」と頬を緩める。

危機乗り越え思い受け継ぐ



# 横浜市瀬谷区総合庁舎 およびニツ橋公園

75

2022 (令和4) 年12月21日掲載

横浜市の最西部に位置する瀬谷区は、同市内にあって自然環境に恵まれた街としても知られる。その豊かな緑空間を象徴するのがニツ橋公園と一体的に建て替え再整備された『瀬谷区総合庁舎』だ。区庁舎整備では同市初のPFIを導入したこの事業。設計を担った建築家で環境デザイン研究所会長の仙田満氏は「主役は公園であり緑。その背景となる建築のあり様を考えた」と語る。



全景（公園から庁舎2階へのアプローチ）

## 緑と共生し、まちに開かれた「杜の庁舎」

仙田氏は、市中央部の保土ヶ谷区出身だが、瀬谷は父方の祖父が生まれた「仙田家ゆかりの地」であり、「子どもの頃はよく遊びに来た」という、原体験を形づくった場所の一つでもある。

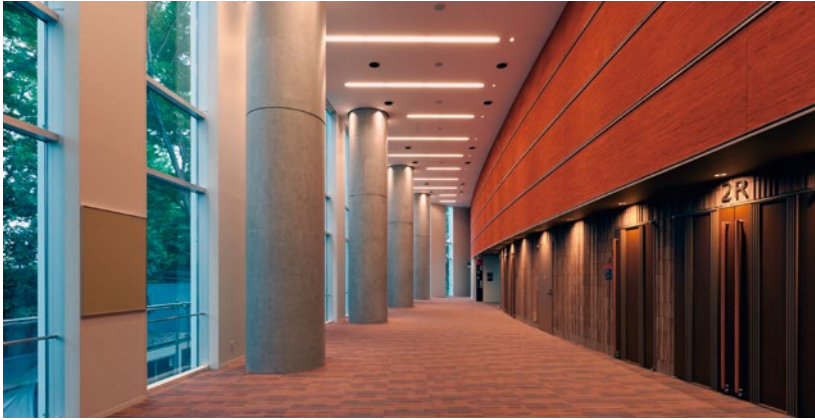
「区民のための杜、杜の庁舎」をテーマとした、このプロジェクトでは、「ケヤキがとても美しい場所で、サクラやイチョウ

など土地の記憶を残す大径木が多数存在していた。この環境をどう守っていくかというところを集中してお手伝いした」と振り返る。

「あらゆる公共施設は子ども連れの人たちが来やすい場所であればいけない」という年来の持論からも「豊かな緑をできるだけ保全・活用しながら、誰もが気軽に立ち寄り、安らぎや憩いの

場となるよう公園を主役とし、その背景として庁舎が建つという新しい景観の創出」を提案した。

庁舎敷地と、これに隣接し地盤が高い公園敷地の高低差を生かすことで、緑豊かな公園から庁舎2階にあるメインエントランスにバリアフリーでアクセスできる。「建築とランドスケープ、内と外の関係性をいつも考えている」というように、公園は庁舎のアプローチ広場でもあり、



公会堂ホワイエ

その一体感ある佇まいは、まさに「杜の庁舎」のコンセプトを明確に実現するものだ。

庁舎は区役所、公会堂、消防署からなり、旧公園の東半分と地下駐車場の上部を連続した公園として再整備した。区役所の待合スペースと公会堂のホワイエは連続的に公園側に配置され、日中は施設側から公園の緑が映え、夜間は公園側からホワイエなどのアクティビティが明るく浮かび上がる。「建築の側から緑が楽しめる視点も重要になる。ここでは地域の中心になる空間を公園と捉え、そこに寄り添う形で建築があり、外部の緑空間、公園に視線が集まるつくり方をしている」とも。

公園は、南側の「遊具広場」と北側の「自由広場」で構成され、相互を緩やかな斜面や回遊園路で結び、一体的な利用を可能とした。遊具広場は、ケヤキ、イチョウなどの既存の大木を保存しながら円形のオープンスペースやオリジナル遊具を整備し、緑豊かな遊びと憩いの場を

つくり出している。自由広場は、地下駐車場の上部に新たに設けられ、開放的な芝生広場と周辺の緑地・休憩スペースで構成している。この二つの広場の間を庁舎2階へのアプローチが象徴的に貫いている。

公園と庁舎は、自由な行き来と一体的な利用を前提に、分かりやすい動線や統一感のあるデザインにも配慮した。公園と庁舎の境界沿いには「とおり空間」を設けて明快な南北軸の動線を構成している。

事務所名にあるとおり、建築にとどまらず地域・都市や造園、インテリア、インダストリアルデザイン、遊具、ファニチャーなど、あらゆるスケールの環境をデザインしてきた。中でも次世代を育む、子どものあそび環境のデザインは一貫したテーマでもある。それだけに「日本には緑と共生する建築が必要だ」と説く。「良い景観をつくっていくのは建物と距離と緑の関数」だとも。

2021年刊行の書籍『遊環構造デザイン』には街並み景観に

関する「個体距離」という章がある。そこでは「建築と緑、建築間の距離が良い景観をつくる上で必要」だと主張する。2階建ての戸建て住宅の場合、結論としては「高さの2倍、およそ12メートルの離間が適正な距離」という。この距離は「京都の町家のようにデザインが共通化していれば近づけられるのではないか」という仮説を立てながら、実験と検証を重ねてきた。「緑も個体距離を縮める有効な手法」とも。

他方、「いまの日本はデザインがバラバラで個体距離がゼロなのですごくハレーションを起こしており落ち着かない」と指摘。だからこそ「デザインの力をもっと認めてほしい」と訴える。財政が厳しい時代であるからこそ、「限られた財源でより高い効果を上げるようなことを、山積する社会課題を逆手にとって地域をどう活性化し元気にしていくかを考えていくことが求められる」と力を込める。



仙田氏

## 仙田 満氏 (環境デザイン研究所会長) に聞く





全景。スタンドが増設され、外周には回遊デッキが設けられた。

プロ野球・セリーグ、横浜DeNAベイスターズの本拠地で、「ハマスタ」の愛称で多くの人に親しまれている横浜スタジアムは、わが国初の多目的スタジアムとして1978年4月に開業した。昇降式のマウンドを降下させてフィールドをフラットにできるため、各種スポーツ競技やコンサートなど幅広いイベントにも活用されている。

## 20年に新装開業

コミュニケーションを育むランドマークになりたいという思いを集約した「コミュニティボールパーク」化構想に基づき、2017年から増築・改修工事に着手。右翼・左翼側スタンド（計6,000席）をそれぞれ増設するとともに、新設の左翼側スタンド「ウイング席」、スタジアム外周の回遊デッキ「Yデッキ」、リニューアルしたバックネット裏に「個室観覧席」「屋上テラス席」などを設け、収容人数も大幅に増加して

20年に新装開業した。

より魅力的な球場に、いかに生まれ変わらせるか——。清水建設が設計と施工を通じて追求したのは、この1点に集約できる。コンセプトとなった「コミュニティボールパーク」化構想の実現のための与条件は①プロ野球興行を行いながら2シーズン、主にシーズンオフを使って約3万5,000人の収容人数とする②東京オリンピック2020大会の野球・ソフトボール会場とする——の二つだった。

「今回のリニューアルの背景に、都市公園法の建ぺい率の条例改正があります。それまでの18%から31%に引き上げられ、増築が可能になりました。工事自体は、スタジアムがより収益を上げるため、1塁側ウイングと個室観覧席は1年先行して引き渡しました。そして、20年に3塁側ウイングと回遊デッキが竣工し、グラウンドオープンしています」（清水建設設計本部商業・宿泊施設設計部の平賀直樹グループ長）。





## 既存施設と一体化

横浜スタジアムは、リニューアルに際してのコンセプトのほか、横浜市が描く都市レベルでの「横浜スポーツタウン構想」の中心に位置付けられてもいる。「スタジアムは日本大通りの軸線上にあります。スタジアム前面の中央に噴水があり、スタジアムがそれを受ける形で立地しています。増築するスタンドはあえて、そのライン上まで延ばさず、視線の抜けを確保」(同)することで、開放感を持たせた。市の都市美対策審議会のアドバイスを尊重し、歴史や景観、周辺

施設を踏まえ、関係者との協議を重ねて調和のとれたデザインにした。

また、隣接する横浜公園への動線を意識し、スタジアムを2階レベルで一周する600mのデッキを新設。プロ野球開催時の回遊性を確保するとともに、通常時は市民が散歩しながら球場内を一望できる「ドリームゲート」も提案して2カ所設置した。

既存スタジアムとの一体化も図った。中心座標と観覧席の勾配をそろえてすり鉢状に観覧席を連続させ、2階の回遊デッキレベルで接続することで調和させているが、これは「シームレスに既存部分と増設部分がつながるように、当初から考えていた」(同)ところだという。

一体化を実現する施工技術にメガトラスの構築がある。1塁側のウイング下部には既存の練習場があり、本来ならその位置に柱を設けるが、練習場を有効利用するため約23mのメガトラスで練習場をまたぎ、その上に既存スタンドと一体化したウイング席を設けた。

## 効率的に仮囲い移動

増築部分の3次元対応も工夫した。「1、3塁側の増築部分は、すり鉢状になっています。最上段も同じ高さではなく、少しずつ上がっています。鉄骨が3次元に取り合ってくるので、平面上で表現して鉄骨を製作する段階から大変な思いをしました」(清水

建設横浜支店の中村竜平工事長)。

施工技術のソフト対応の点にも特徴的な取り組みがある。「最も苦勞したことの一つ」(同)が仮囲いの移動だ。約3万人の観客の避難動線確保は避けて通れない課題で、「年間80日あるプロ野球興行日に工事エリアを開放して、また元に戻すことを繰り返す必要があり、どうやって仮囲いを効率的に移動するかを考えました。アメフトや高校野球の試合の時も実施しましたが、観客が安全に歩行できるゴムマットの厚みにも配慮」(同)するとともに、仮囲いのユニット化などにも工夫を凝らした。

中村工事長は、現業長の立場で従事し、基本的にはライトとレフトのスタンド、回遊デッキなどを担当し、増設の観覧棟は同じ横浜支店所属の三澤裕樹工事長が役割分担して担当。「個室観覧棟の記者席の屋根切り替えといった特殊な進め方が求められており、工期も押していましたので、応援の形で入りました」(三澤工事長)。しかも資材確保がタイトになりつつあり、労務も繁忙な時期だった。いまではグランドオープンから2年ほどが経過しているが、「忙しく大変な時などふと、ハマスタを完成させられたのだからできないことはない、と自信につながっている」(同)と振り返る。



# 横浜能楽堂

横浜能楽堂にある関東最古の能舞台は、1875年に能をこよなく愛した旧加賀藩主・前田齊泰により東京・根岸に建てられた。1965年に解体されたが、能楽関係者や市民の思いにより、再び、横浜の地で歴史を刻むことになる。”再生”の中心的役割を果たしたのが、国立能楽堂などの設計を手がけた建築家・大江宏の思いを受け継いだ、大江宏建築事務所の面々だった。設計に携わった大江建築アトリエの大江新代表と当時大江事務所に在籍していた奥富利幸近畿大建築学部教授に、能舞台復原の話を知るとともに、大規模改修の設計を手がける松田平田設計の白井達雄常務執行役員にコンセプトを語ってもらった。

## 大江宏の哲学引き出す

能舞台は齊泰の死後、1919年に東京・染井（現東京都豊島区）の旧高松藩主・松平頼寿邸に移築され、「染井能舞台」として親しまれた。数々の名舞台が演じられてきたものの、老朽化などのため解体し、部材が保存されていた。

それを知った横浜在住の能楽師やその周りの人々を中心に、能楽堂建設に向けた運動が起こり、次第に市民も声を上げ始める。5万筆を超える署名も集まった。

能楽師が能を演じる能舞台の復原と、それを包む能楽堂の建物の新築設計は、大江宏が没した翌年にスタート。当時事務

所を主宰した大江新氏を中心に、奥富氏らが実務面を担当した。

奥富氏は「大江事務所としても、宏先生の遺志を継ぎ、どのように横浜市民の皆さんに愛される能楽堂ができるか考えました」と話す。その過程では「宏だったらこう考えるだろうと想像しながらつくっていきました。誰がリーダーシップをとるでもなく、亡くなった宏に導かれるように」と新氏。

能楽堂の建設に際しては、いくつかの敷地が候補に挙がった。最終的に、神奈川県立音楽堂や県立図書館など前川國男作品が周囲に立ち並ぶ、掃部山公園の南端部に決まった。狭小な敷地だったが、多くの人々に歴史ある能舞台に触れてもらうため、

500席を設けるという目標も課せられる。目標達成のため、2階席を設けることにした。

能舞台の復原では、初めはどこにアイデンティティーがあるかわからず、苦労した。地覆（建物の土台）から下の部材も残っていなかった。その流れが変わるのが、建設当時の根岸邸が描かれた絵図の発見だ。能舞台も描かれていた。

奥富氏は「池のほとりに能舞台が建っていたことがわかりました。玉石の上に載っている能舞台というのは非常に珍しいのです。再現しているのでぜひ見ていただきたいです」と説明する。幸運なことに、能舞台の横に描かれていた「煎茶席三華亭」も、石川県金沢市の「成巽閣」に残っていた。「横浜市の方と見に行き、設計のイメージが一気に広がりました」と奥富氏は振り返る。

屋根の復原にも苦労した。初めは形がわからなかったが、保管されていた部材を仮組することで、ようやく寄棟の能舞台ということが判明した。復原された屋根の下天井は、能楽師の意見



左：左から奥富氏、大江新氏、白井氏／右：玉石の上に載っている能舞台

## 文化財を“生かす”復原

も参考にしながら建築当時とは異なるつくりにした。

新氏は「現代の能楽師の方々に使っていただいてこそ、建物は“生きる”。“文化財を生かす”という意味で、天井は当時と変わっています」と話す。

能楽堂の光天井も大きな特徴だ。拡散透過材を通して間接的に光を透過させることで、自然光のように優しい印象を与える。能は元々、屋外で演じられていたからこそ、非日常ではなく、日常的な空間の演出にこだわった。

歴史的建築物を残す意義について新氏は、「昔の人たちが築いてきた知恵や技を大事にして、それと向き合おうという姿勢があると、建築に魅力が出てくるのです。それが命だと思えます。

昔の人たちの痕跡を上手に盛り込んだ建築には面白みや深みがあります」と力を込める。

白井氏は「建物には、その背景にある歴史、人が使ってきた手の跡のようなものがあります。その跡は壊してしまったらもう二度と戻らない。”古い時代のもの”だから残すべきだというレベルの話ではありません。ずっと残ってきた建物には、過去を生きてきた人々のさまざまな生活の息づかいを感じます。そこに歴史的建造物を残す意味があるように思うのです」と語る。

奥富氏は「この能舞台もそうですが、工匠の人の痕跡が残っています。削り方は全部異なっており、それを見たとどの時代にこの材料を扱ったのかがわかる

のです。当時の人の思いや精神、そうしたものが実体的に残っていくのが建物、文化財です。文献と異なり、建物の場合はリアルに材料として残ってくる。つくり方を見ると、当時の社会背景や、どのような考えでつくられたのかが読み取れるのです。生きた証人のように」と話す。大規模改修では、見所の特定天井改修工事に合わせて、設備工事などを進める。白井氏は改修設計を手がけるに当たり、「中の見えない部分はより良い施設となるように変えますが、見えるところはできるだけ変えない。これを自分たちのルールとしています」と言い切る。

見えない部分をより良く変更







外観。区役所、消防署、土木事務所、公会堂が一体となった複合施設

横浜市南区総合庁舎には地域との融和や機能性、利便性、さらには歴史の継承と区民の安全・安心の拠点といった公共施設に求められる基本的な要素が十二分に詰まっている。区役所、消防署、土木事務所、公会堂が一体となった複合施設だが、その動線は流ちょうで、外観も抑制をきかせたデザインながら、しっかりと存在感を醸し出している。竣工して7年。設計監理を石本建築事務所が担当した。同社設計部門の小林一文執行役員グループ統括、エンジニアリング部門環境グループの関根能文、米山浩一両部長の3氏に設計意図やこだわった点などを聞いた。

## 区内8番目の「丘」

設計着手に際し、「広いまとまった敷地はあるが、動線を含めて、複数の施設機能をどう配置してうまくまとめるかが大きな課題だった」と振り返る。そして、南区は七つの丘でできており、その地理的な特徴や地域的要素、歴史性をいかにして反映するかにも腐心したという。

中心施設である南区役所の

場合、「機能性はもとより、親しみのある温かさを感じられる施設」であることを心掛け、その象徴として外壁を区の花「さくら」の花吹雪をイメージしたコンクリートパネルで仕上げている。

地域の象徴を外装に反映

空間構成としては、1階フロアは区役所窓口のない多目的スペースとし、庁舎機能は2階に集約したワンフロアサービスを実現。ユニバーサルデザインの採用や子育て支援設備も充実している。

一方、区役所と消防署は災害時には業務の関連や連携が欠かせないが、平時の往き来はほとんどない。しかし、いざというときには一体的な活動が求められる。そのことを意識し、「庁舎、消防署、土木事務所、公会堂は日常的には分離しながら運用し、災害時には一体で機能できる動線計画としている」という。

立地特性にも配慮した。区内にある七つの丘になぞらえ、総合庁舎全体を第8の丘「南区さくらの丘」と位置付けるとともに、屋上緑化は本格的植栽とし、庁舎

積極的に環境配慮

周辺部の離れた地上レベルからも緑化がうかがえる庭園をつくり上げた。また、建設地に関東大震災での復興第1号小学校として建設されていた旧三吉小学校の手すりなどの遺物を展示、歴史の記憶を残

しているのも特徴の一つだ。

いうまでもなく、総合庁舎は災害対応の中心的拠点の一つである。何より庁舎自体が災害に強くなくてはいけない。そこで、地震被害に備えて免震構造を採用しているほか、浸水対策で低層部に機械室は置かず、6階にまとめて配置した。屋上には太陽光発電40kWを設置して環境負荷を低減しているのを始め、「非常時に備えた電源の多重化を実現」している。

さらに、この総合庁舎の先進性を示す事例に「省エネ」で「環境に配慮」している点がある。

「高い環境性能を目指すということで、条件としてCASBEE横浜Sランク取得が市から求められていた」ため、環境配慮には積極的に取り組んだ。

特に自然通風は一段踏み込んだ取り組みとして、奥行きのある建物でも風向きなどに影響されず、できるだけ自然の空気が流れるように「サーキュレーター併用空調システム」を採用。「かなりオリジナルな技術」と胸を張るように、このシステムは自信作と言えそうだ。

南区総合庁舎を訪れて感じるのは、延べ床面積約2万7,500㎡に対する予断とのギャップである。一帯では抜きんてた大きさにもかかわらず、過度な威風や圧迫感とは無縁で、違和感なく町並みに溶け込んでおり、その実大規模に圧倒されることはない。しかし、矛盾するようだが、遠目にも一目でわかる、区を中心施設の区庁舎だと存在感を放っている。「設計の初期段階から、できるだけボリューム感を抑えるという思いはあった。そこは、かなり意図した」。区民の身近な存在であろうという、設計の狙いはみごとに成功しているといえる。

横浜市の担当者の一員として設計業務に携わった市建築局の高松誠課長補佐も「基本設計7カ月、実施設計9カ月という非常に厳しいスケジュールでしたが、素晴らしい施設を設計していただきました」と誇る。



左：屋上庭園／右：西側公道から。町並みに溶け込んでいる



# 消防本部庁舎

「安全・安心を実感できる都市ヨコハマ、実現への象徴となるプロジェクトがある。市民の安全・安心を守る司令塔として、消防・防災活動の中核を担う「消防本部庁舎等整備事業」だ。心臓部である司令センターを配置する新たな本部庁舎は免震構造を採用。大規模な災害が発生した場合でも、継続的に機能を発揮できる活動拠点の整備が着々と進む。

この事業では、中核となる消防本部庁舎の整備と消防通信指令システムの更新を一体的に行う。老朽化への対応や機能強化といった従来からの課題解消を目的に移転整備した保土ヶ谷消防署の解体跡地に新たな消防本部庁舎を建設する。



全景

設計者とのコミュニケーションの中で「お互いのイメージをすりあわせてきちんと共有できていることが大きい。何よりも「良い建物を造りたい」という向かうべき方向性は同じ。その思いは間違いなく共通している」と話す。

実際に「消防本部としての機能を継続的に発揮させるための免震構造の採用だけでなく、しっかりとした硬さを感じさせる建物のファサード（外観）は市民にとって困ったときに頼りになる。そんな安心感を与える」とも。

「市民に親しまれる頼りがいのある建物になってほしい」とするように「堅牢な建物を」という設計のコンセプトが「われわれの施工によって、できるだけ多くの人に伝わってほしい」と力を込める。

新築工事は2020年12月から本格着手した。地上部の立ち上げでは狭い敷地とあってタワークレーンを1階の梁に抱きつく形で設置し、作業空間を確保したという。クレーンの作業半径が限られる厳しい制約条

## 市民の安全安心を守る新たな砦

戸田建設JV  
丸橋靖明作業所長

建築工事を担う戸田建設・小俣組・小雀建設JVの丸橋靖明作業所長は「われわれ施工者の役割は設計者の意図をいかに

的確かつ忠実に再現できるかということにある。それが最終的に発注者である横浜市が求める「安全・安心を実感できる都市ヨコハマ」の拠点の構築につながっていく」と言い切る。

## 大規模災害時も 機能を継続発揮

松田平田設計横浜事務所  
設計部長 浅野智之氏——

現横浜市消防本部が抱える主な課題として、「大規模災害時に災害対応の方針決定及び緊急消防援助隊などの関係機関との調整を行うためのスペースが不十分」「情報収集機能の中枢である司令センターが消防本部と別棟になっている」「耐震構造基準には適合しているが、大規模地震発生時に、建物内部や重要機器が被害を受ける恐れがある」などがあった。

この課題を解決し、消防防災活動の中枢としての役割を果たす庁舎として、①迅速かつ機動的に消防機能を発揮できる庁舎②大規模災害にも消防機能を継続発揮できる庁舎③安心、信頼を実感できる庁舎④社会の変化に柔軟に対応できる庁舎——の四つの基本方針をもとに「災害に強い消防本部庁舎」を目指した。



航空写真

件下で日々の打ち合わせを徹底し、緻密な作業工程を組み立ててきた。

隣接する保土ヶ谷区役所とNTT新保土ヶ谷ビルに挟まれた建設地は「道路に面した出入り口のゲートが一つしかない。思っていた以上に歩行者や車の往来が多く、間口が狭い上に奥行きもあるため資機材の搬出入調整に腐心した」と振り返る。

ゲート前面には常に3-4人の交通誘導員を配置するなど、「市民の安全・安心を守る消防本部庁舎の整備で事故を起こすことが絶対にあってはならない」と、第三者対策をはじめ安全には細心の注意を払って施工を進めてきた。

免震構造を採用

水害の備えも万全

23年1月末現在の進捗率は81%。着工からの無災害記録は延べ26万3,568時間（1月末現在）でいまなお継続中だ。最終的には延べ31万時間の目標達成を目指す。

今後、仕上げ工事が本格化する。「日ごろから協力会社の作業員と知恵を出し合いながら、これまで予定どおりに施工を進めてきた。施工のプロフェッショナルとして、現場に携わる作業員それぞれが持てるスキルをしっかりと発揮できる、適材適所、の現場運営を続けることで、最後まで気を抜かずに施工を進めたい」と意気込む。

工期は23年7月31日まで。指令システム設備の更新工事を経て、10月10日に開庁し、11月9日から司令センターの運用を開始する予定だ。別館は24年度末の運用を目指す。



鳥瞰図（提供：株式会社松田平田設計）



# 横浜市立万騎が原小学校

100

2023 (令和5) 年3月29日掲載

青い海は港町・横浜市のトレードマークだが、同市西部の旭区にある市立万騎が原小学校は、小高い山と森林が隣り合った緑の学校だ。建設から半世紀以上が経過した校舎の建て替えに当たって同市は、戦後初の木造校舎建築に挑む。設計を担う梓設計は、森の中を想起させる階段広場を施設の核に、自然の風や光を取り込んだ開放的な「森の学校」をデザインした。同社執行役員アーキテクト部門副代表BASE01ゼネラルマネージャーの鈴木教久氏、同部門BASE02チーフマネージャー文教・庁舎ドメインエグゼクティブダイレクターの古田知美氏、同部門BASE02アソシエイトの後藤正太郎氏の3人に、木造校舎実現に向けた設計上の工夫や思いを聞いた。



「コモレビコモンズ」のイメージ

## 学びの広場

### 「コモレビコモンズ」

「コモレビコモンズ」は、木々を模した樹状の柱が吹き抜けの天井を支える象徴的な空間だ。鈴木氏は「児童たちに森の中で学習している雰囲気を感じてもらえるように、本物の森を感じられる空間を目指している」と話す。

コモンズは、周辺に配置した図書室やその他特別教室などと一体的に利用でき、児童の学習、発表、交流のための広場にもなる。階段は日常的に利用する動線でありながら、グループ学習や発表、イベントの際には観覧席になるなど学校生活の多様な場面で活用できる二面性が特徴だ。

自然換気窓や天井に設けたハイサイドライトの採光により、外部の心地よい風と光を取り込んで施設全体に行き渡らせるなど、吹き抜けは機能面でも中心的な役割を持っている。

森の中の学び舎を具現化

## 戦後初、木造校舎への挑戦

既存校舎は、自然公園に隣接しており、市民が日常的に緑と親しむ周辺環境だ。老朽化に伴う建て替えを検討していた横浜市は、同校の環境や法的条件などを踏まえ、「同市建築物における木材の利用の促進に関する方針」に基づく初めての木造校舎建築への挑戦を決めた。

公募型簡易プロポーザルで選

ばれた梓設計は「木漏れ日と爽やかな風の中で、健やかな子どもを育む『森の学校』」をコンセプトにした木造三階建て校舎を提案した。木々に囲まれた森の中を象徴する吹き抜け大空間「コモレビコモンズ」を中心に、児童のさまざまな活動が校舎全体に広がっていく姿を描いた。

## より開放的に 「壁タイプ」を採用 コスト・調達も工夫

木造三階建ての校舎、いわゆる「木三学」は、2015年の建築基準法改正で防火性能の基準が緩和されて以来、建築事例が増えている。現在、木造建築物は、3,000㎡ごとに耐火性能が高いコアや壁で区切り、延焼防止に備える必要がある。

「木三学」の事例のほとんどは「コアタイプ」を採用しているが、万騎が原小では、より開放的な空間設計ができる「壁タイプ」を選択した。鈴木氏は「政令市として全国最多の人口を抱える横浜市の新しい挑戦には、公共建築に対する高いメッセージ性がある。この先の同市の学校建築にもつながるような、新しく魅力的な木造学校をつくりたい」と思いを語る。

参考になる事例や知見が少ない壁タイプへの挑戦について、後藤氏は「開放的な大空間を木造で実現するために、技術とコストの両面から手探りで試行錯誤をしてきた。壁の構造は、木とRCを総合的に比較検討した

結果、RC造を採用した」と振り返る。

木造の大空間をつくる場合は大断面集成材を使うことが考えられるが、鈴木氏は「コストの負担が大きい。費用を抑えるためには流通量が多い規格の部材を活用し、細かいスパンで設計することが必要だ」と指摘する。

ウッドショック以来、安価な外国産木材の調達が難しくなっている。設計に当たっては、木構造や木材供給の専門家の知見を反映することで、スムーズな発注・加工・納品を目指した。

## 適材適所で 木は身近になる

プロジェクトを進めてみて鈴木氏は「木造建築の技術は進歩している。これまで以上の空間が実現できる」と手応えを感じている。調達やコスト面に課題はあるが、「小さなスパンで全体コストを低く抑え、施設の目玉をつくる。こうして設計にメリハリをつけていけば、RC造に負けない建築が作れる」と強調する。

木造建築の普及について後

藤氏は「木造そのものが目的になってしまうと、ただの割高な建物になりかねない。適材適所の考えが大切だ。部分的な木造や混構造を使い分けていけば、木造を挑戦しやすい身近なものに感じられるようになるだろう」と話す。

古田氏は「RCや木それぞれの良さを活かしながら経済的な設計としていく。これにより木造が普及し、需要が継続することで森林の持続可能性につながる」と話す。さらに、「木造建築の事例はまだあまり多くない。普及が進めば遮音などの木造を前提とした性能値も蓄積してくる」と見通す。

公共施設の中でも学校は、合計の床面積が多い施設だ。地球環境への対応を考える上で、学校建築を変えることの影響は大きい。鈴木氏は、「自然に親しみや関心を持った子どもが増えていくことは未来の環境にもつながるはずだ。『森の学校』がその一助になれば嬉しい」と話す。



左：左から鈴木氏、古田氏、後藤氏／右：鳥瞰図





横浜市開港記念会館と横浜市建築局はほぼ同時代を歩んできた。開港記念会館の竣工・開館が1917年、横浜市建築局の前身である建築課の誕生が1922年。初代建築課長は開港記念会館設計者の山田七五郎（原案はコンペ1等の福田重義）だった。その意味で開港記念会館は名実ともに公共建築を体現した最初の建築と言えるだろう。建築史家・建築批評家の五十嵐太郎氏は開港記念会館について「古典主義建築を踏襲しているのだが、その『文法』をさまざまな部分で崩して、自由に遊んでいるのがとてもおもしろい。しかもデザインの質が高い。かなり個性的な建築で、フリークラシックと一言で片づけずに、文法崩しのデザインの面白さをもっと具体的に伝えていきたいと思う」と話す。

## 古典主義を踏襲しつつ自由に遊ぶ

横浜市開港記念会館は1917年に開館したが、23年の関東大震災で時計塔と壁の一部をわずかに残して倒壊した。このため頑強な建築に建て直そうと災害復旧工事によって27年に復元された。工事の対象外だったドーム屋根は89年、横浜市によって復元されている。同年、国の重要文化財にも指定された。所在地は、1874年から時計台の町会所として親しまれていたところで、

1906年に焼失。その時計台の文脈が現在の建物に引き継がれた。

「最初に開館したのは明治時代だが、近代以前の高い建築は寺の塔や城郭くらいしかなかった。だから近代を迎え、市民のランドマークとなる塔を持つ建物が横浜市によって建てられた意義は大きい。しかも財源は市民の寄付、設計は初のコンペということで、まさに公共建築の

先駆的な建物として位置付けられると思う。開港記念会館が公共建築100周年と深く繋がっていることが改めて分かる」

塔はジャックの塔とも呼ばれ、「大さん橋国際客船ターミナルやそこから出ている船から町の方を見ると、キングの塔、クィーンの塔とともに、三つの塔が見える視点が今も残り、すごく横浜らしいランドマークだなと思う」とも述べる。角地という立地

外観





左：ジャックの塔とも呼ばれている／右：五十嵐氏

建築史家・建築批評家

五十嵐太郎氏に聞く

についても「日本の近代建築の特徴でもあるが、メインとなる顔がうまく配置されていて斜めから写真が撮りたくなるようなとてもシンボリックな建て方だ」と言う。

辰野式フリークラシックと言われるデザインについてはこう話す。

「辰野金吾が設計した東京駅に代表される当時の赤いレンガと白い花崗岩の組み合わせがここでも採用されていて、要素としては古典主義建築を踏襲しているが、かなり自由に遊んで

いるというのがこの建築の面白いところ。例えば、扉周りの意匠は、海側の本町通りのファサードにある二カ所をフォーマルにする一方、裏側の細い南仲通りの扉ではベディメントの内側のアーチ、両側のトリグリフといった一番変則的な遊びを取り入れ、正面と裏との格式を変えている。ただ、正面側のファサードも、二

層目のみにイオニア式円柱が並ぶという変わったことをやっている。古典建築には文法のようにかなり厳密なルールがあるのだが、この建築家は多分それを知った上で実にユニークなことをやっている。ルネサンス後にマニエリスムという古典主義をずらす動きがあったが、開港記念会館ではほかにもいろいろなところでマニエリスム的なおきて破りが見られる」

ヨーロッパ建築をただ真似ているというのではなく、古典建築の単語はしっかりと持ちつつ、その組み合わせが独特で、崩し方、凝り方がよく考えられているということだ。

「古典主義を崩した理由の一つはデザインの密度を上げたかったからではないか。メイン通りの面は特に密度を濃くするとか、メイン以外の通りの面ではより羽目を外すという感じがある。ただ、3面いずれも手を抜いておらずデザインの質がとても高い。以前開催した『かたちが語るとき』という展覧会で伝

えたように、形態そのものが語りかけてくるのがいっぱいある。建築によってそんなに語らないものと饒舌なものとがあって、開港記念会館は饒舌に語りかけてくる建築だと思う。それをしっかりと読み取って伝えていきたい」

横浜市が建築に果たしてきた役割について、「関東大震災後や戦後に住宅の供給を推進したり、復興小学校に取り組んだ歴史があること、地区センターなどの設計で若手建築家に積極的にチャンスを与えたこと、横浜ランドマークタワーや象の鼻パーク、大さん橋ターミナルでシンボル性の転換を図ったことなど、時代の要請に応え、時代を切り開いてきたと思う。今後は、実績にこだわらずに若手が活躍できる先進的なコンペを実施してほしい。大さん橋は、建築家の故磯崎新氏が審査を主導したコンペを通じて、画期的で斬新なシンボルとなった。そんな建築をこれからも期待している」と語る。



## 01 旧円通寺客殿 (旧木村家住宅主屋)



●所在地：金沢区瀬戸20-3 金沢八景権現山公園内 ●竣工年：江戸時代後期 ●延べ面積：141㎡ ●構造種別：木造 ●階数：地上1階 ●設計者：【当初】不詳【2022復元】建文 ●施工者：【当初】不詳【2022復元】〈建築〉馬淵建設〈電気〉K・T・A〈空調衛生〉今野設備

## 02 旧横溝家住宅主屋



●所在地：鶴見区獅子ヶ谷三丁目10-2 農村生活館 みその公園内 ●竣工年：江戸時代後期～明治時代中期 ●延べ面積：352㎡ ●構造種別：木造 ●階数：地上2階 ●設計者：【当初】不詳【1989保存修理】歴史環境計画研究所 ●施工者：【当初】不詳【1989保存修理】関工務店

## 03 旧大岡家長屋門



日刊建設通信新聞社提供

●所在地：瀬谷区阿久和東一丁目17 長屋門公園内 ●竣工年：1887 (明治20) 年 ●延べ面積：180㎡ ●構造種別：木造 ●階数：地上2階 ●設計者：【当初】不詳【1992復元修理】南雲建築設計研究所 ●施工者：【当初】浅尾三四郎・大工栄二郎【1992復元修理】〈建築〉関工務店〈電気〉小車電気工事〈給排水・防災〉昭和設備工業

## 04 旧金子家住宅主屋



●所在地：戸塚区舞岡町1764 舞岡公園内 ●竣工年：明治時代後期 ●延べ面積：629㎡ ●構造種別：木造 ●階数：地上1階 ●設計者：【当初】不詳【1995移築復元】農村・都市計画研究所、建築文化研究所 ●施工者：【当初】不詳【1995移築復元】〈建築〉黒崎工務店〈電気〉三栄電設〈給排水〉マコト設備工業〈防犯防火〉昭和設備工業、能美防災、国際連邦警備保障

## 05 外交官の家



日刊建設通信新聞社提供

●所在地：中区山手町16 山手イタリア山庭園内 ●竣工年：1910 (明治43) 年 ●延べ面積：416㎡ ●構造種別：木造 ●階数：地上2階塔屋1階 ●設計者：【当初】J.M.ガーディナー【1997移築】文化財建造物保存技術協会 ●施

工者：【当初】横田組【1997移築】〈建築〉竹中工務店〈電気〉明和電設工業〈衛生〉神中工業

## 06 旧清水製糸場本館 (天王森泉館)



●所在地：泉区和泉町300 天王森泉公園内 ●竣工年：1911 (明治44) 年 ●延べ面積：325㎡ ●構造種別：木造 ●階数：地上2階 ●設計者：【当初】不詳【1997移築復元・増築】農村・都市計画研究所 ●施工者：【当初】不詳【1997移築復元・増築】細沼工務店

## 07 横浜赤レンガ倉庫



©2022 YOKOHAMA RED BRICK WAREHOUSE

●所在地：中区新港一丁目1 ●竣工年：〔1号館〕1913 (大正2) 年〔2号館〕1911 (明治44) 年 ●延べ面積：〔1号館〕5,942㎡〔2号館〕11,255㎡ ●構造種別：レンガ造一部S造 ●階数：地上3階 ●設計者：【当初】妻木頼黄【1999保存工事】建築研究協会、国設計【2002活用工事】新居千秋都市建築設計 ●施工者：【当初】〔1号棟〕原木仙之助〔2号棟〕大蔵省【1999保存工事】竹中工務店【2002保存改修】〔1号棟〕〈建築〉竹中・小松JV〈電気〉丸子・千代田計装JV〈空調〉川本・三沢JV〈衛生〉エルゴテック〈舞台機構〉森平舞台機構〈舞台照明〉丸茂

電気〈舞台音響・映像〉不二音響〈昇降機〉三菱電機〔2号棟〉〈建築〉竹中工務店〈電気〉関電工〈空調〉高砂熱学工業〈衛生〉三建設備工業〈昇降機〉三菱電機

## 08 西谷浄水場 (旧整水室上屋、旧浄水井上屋、旧配水井上屋)



日刊建設通信新聞社提供

●所在地：保土ヶ谷区川島町522 ●竣工年：1915（大正4）年 ●延べ面積：〔旧整水室上屋 4棟〕各13㎡〔旧浄水井上屋〕22㎡〔旧配水井上屋〕30㎡ ●構造種別：レンガ造 ●階数：地上1階 ●設計者：横浜市水道臨時事業部 ●施工者：直営

## 09 開港記念会館



●所在地：中区本町1-6 ●竣工年：1917（大正6）年 ●延べ面積：4,426㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上2階、地下1階 ●設計者：【当初】市建築課（山田七五郎）【1989ドーム復元】清水建設【2000保存修理】横浜市建築設計協同組合

【2023保存修理】文化財保存計画協会 ●施工者：【当初】清水組【1989ドーム復元】清水建設【2000保存修理】〈建築〉清水建設〈電気〉清進電設〈空調衛生〉山本電気水道〈昇降機〉フジテック【2023保存修理】〈建築〉清水建設〈電気〉誠伸電気〈空調〉オザワ総合設備〈衛生〉アメニティ

## 10 THE BAYS (旧関東財務局 横浜財務事務所)



●所在地：中区日本大通34 ●竣工年：1928（昭和3）年 ●延べ面積：1,981㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上4階、地下1階 ●設計者：【当初】渡辺節建築事務所【2016耐震補強等】横浜市建築設計協同組合 ●施工者：【当初】佐伯組【2016耐震補強等】〈建築〉小俣組〈電気〉栄光電設〈空調衛生〉ピオン工業〈昇降機〉横浜エレベータ

## 11 旧第一銀行 横浜支店



●所在地：中区本町6-50-1 ●竣工年：1929（昭和4）年 ●延べ面積：1,934㎡（旧第一銀行部分） ●構造種別：SRC造 ●階数：地上3階、地下2階、塔屋1階 ●設計者：【当初】西村好時、清水組【2003曳家・意匠再現】都市基盤整

備公団、横総合計画事務所 ●施工者：【当初】清水組【2003曳家・意匠再現（アイランドタワーへ増築）】〈建築〉竹中・清水・戸田JV〈電気〉関電工・四電工・近畿工業JV〈空調衛生〉新菱冷熱・日本設備・共栄JV

## 12 横浜都市発展記念館・ 横浜ユーラシア文化館 (旧横浜市外電話局)



●所在地：中区日本大通12 ●竣工年：1929（昭和4）年 ●延べ面積：2,906㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上4階、地下1階 ●設計者：【当初】逓信省営繕課（中山広吉）【2002改修時】日建設計 ●施工者：【当初】安藤組【2002改修】〈建築〉和同建設〈建築〉共栄社〈空調衛生〉神奈川保健事業社〈昇降機〉東芝エレベータ【2002搬入口増築】〈建築〉白井組〈電気〉洋光電気工事

## 13 横浜開港資料館 (旧横浜英国総領事館)



●所在地：中区日本大通3 ●竣工年：1931（昭和6）年 ●延べ面積：〔旧館〕1,041㎡〔新館〕1,690㎡ ●構造種別：〔旧館〕RC造〔新館〕RC造一部S造 ●階数：地上3階、地下1階 ●設計者：【当初】英国工務省【1981新館増築】浦辺建築事務所 ●施工者：【当初】清水建設【1981新館増築】〈建築〉清水建設〈電気〉共栄社〈空調衛生〉第一設備〈昇降機〉横浜エレベータ



## 14 大倉山記念館



日刊建設通信新聞社提供

●所在地：港北区大倉山二丁目10-1  
●竣工年：1932（昭和7）年 ●延べ面積：2,990㎡ ●構造種別：SRC造  
●階数：地上3階 ●設計者：【当初】長野宇平治【1984改修】環境開発研究所 ●施工者：【当初】竹中工務店【1984改修】〈建築〉竹中工務店〈電気〉共栄社〈空調衛生〉川本工業

## 15 インド水塔



●所在地：中区山下町279 山下公園内 ●竣工年：1939（昭和14）年 ●構造種別：RC造一部S造 ●階数：地上1階 ●設計者：【当初】鷺巣昌（第四代建築課長）【2023改修】山手総合計画研究所 ●施工者：【当初】清水組【2023改修】ヨコテック

## 16 俣野別邸



日刊建設通信新聞社提供

●所在地：戸塚区東俣野町80-1 ほか  
●竣工年：【当初】1939（昭和14）年【再建】2016（平成28）年 ●延べ面積：803㎡ ●構造種別：木造、一部レン

方造 ●階数：地上2階、地下1階 ●設計者：【当初】佐藤秀三【2016復元】山手総合計画研究所 ●施工者：【当初】佐藤秀三建築工務所【2016復元】〈建築〉佐藤秀三〈電気〉三沢電機〈空調衛生〉南設備工業〈昇降機〉中央エレベーター工業

## 17 7代目市庁舎



●所在地：中区港町1-1 ●竣工年：1959（昭和34）年 ●延べ面積：30,719㎡ ●構造種別：SRC造 ●階数：地上8階、地下1階 ●設計者：【当初】村野・森建築事務所（村野藤吾）【2009耐震補強（免震レトロフィット）】東畑建築事務所 ●施工者：〈建築〉【1期（仮囲、根切等）】松尾工務店【2～4期】戸田組〈弱電設備〉東洋電機通信工業〈強電設備〉関東電気工事〈空調〉大阪電気商会大阪暖房商会〈衛生〉三機工業〈昇降機〉東洋オーチス・エレベータ〈自動電話交換設備〉富士通信機製造【2009耐震補強（免震レトロフィット）】戸田・馬淵・住友電設・ダイダン異業種JV

## 18 横浜マリンタワー



●所在地：中区山下町14-1 ●竣工年：1961（昭和36）年 ●延べ面積：4,389㎡ ●構造種別：〔展望部、塔体部〕S造、〔低層部〕SRC造一部RC造、S造 ●階数：地上4階 ●設計者：【当初】清水建設【2009改修】日建設計【2022改修】日建設計 ●施工者：【当初】清水建設【2009改修】【第1工区】清水建設【第2工区】〈建築〉渡辺組〈電気〉共栄社〈空調〉日本工業所〈衛生〉興信工業〈昇降機〉日立ビルシステム【第3工区】〈外構〉奈良造園土木【2022改修】〈建築〉渡辺組〈電気〉共栄社〈空調衛生〉日本工業所〈昇降機〉三菱電機ビルテクノサービス

## 19 横浜市立大学 金沢八景キャンパス 本校舎



●所在地：金沢区瀬戸22-2 ●竣工年：1963（昭和38）年 ●延べ面積：9,046㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上3階、地下1階 ●設計者：【当初】村野・森建築事務所（村野藤吾）【2015耐震補強】横浜市建築設計協同組合 ●施工者：【当初】大林組【2015耐震補強】小俣組

## 20 神奈川区総合庁舎（神奈川区役所・神奈川消防署）



日刊建設通信新聞社提供

●所在地：神奈川区広台太田町3-8 ●竣工年：1964（昭和39）年 ●延べ面積：〔本館〕9,192㎡〔別館〕5,760㎡

●構造種別：RC造、一部SRC造 ●階数：〔本館〕地上5階、地下1階〔別館〕地上3階、地下2階 ●設計者：【当初】松田平田設計事務所【1990別館増築】松田平田坂本設計事務所 ●施工者：【当初】〈建築〉三木組〈電気・昇降機〉共栄社〈空調衛生〉東横工業【1990別館増築】〈建築〉三木・見上・司JV〈電気〉神電工・江電社・山下JV〈空調〉大澤・山本・三井・戸塚JV〈衛生〉昭和設備工業〈昇降機〉日立製作所〈自家発電設備〉富士電機〈立体駐車場設備〉石川島播磨重工業

## 21 三殿台考古館 住居址保護棟



●所在地：磯子区岡村四丁目11-22 三殿台考古館内 ●竣工年：1964（昭和39）年 ●延べ面積：431㎡ ●構造種別：RC造一部S造 ●階数：地上1階 ●設計者：大岡實 ●施工者：市営繕課

## 22 三ツ沢公園球技場 （ニッパツ三ツ沢球技場）



●所在地：神奈川区三ツ沢西町3-1 三ツ沢公園内 ●竣工年：1964（昭和39）年 ●延べ面積：11,678㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上3階 ●設計者：福永建築設計事務所 ●施工者：【当初】藤田組【1993増築】〈建築〉フ

ジタ・三木JV〈電気〉シンデン・東陽電業JV〈空調衛生〉日宝工業

## 23 中消防署



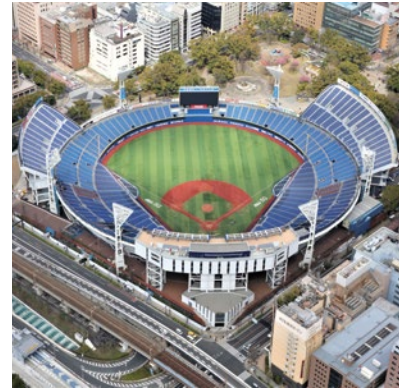
●所在地：中区山吹町2-2 ●竣工年：1976（昭和51）年 ●延べ面積：2,498㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上6階 ●設計者：氏家隆正設計事務所 ●施工者：〈建築〉和同建設〈電気〉藤沢電気〈衛生空調〉昭和設備工業〈構内電話交換設備〉日本電気〈昇降機〉三精輸送

## 24 大佛次郎記念館



●所在地：中区山手町113 港の見える丘公園内 ●竣工年：1977（昭和52）年 ●延べ面積：1,166㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上2階、地下2階 ●設計者：浦辺建築事務所（浦辺鎮太郎） ●施工者：清水建設

## 25 横浜スタジアム



●所在地：中区横浜公園 ●竣工年：1978（昭和53）年 ●延べ面積：46,295㎡ ●構造種別：SRC造、RC造、S造 ●階数：地上4階、地下1階 ●設計者：【当初】創和設計、協力・鎌田建築研究所【2020増築・改修】清水建設 ●施工者：【当初】横浜スタジアムJV（清水建設、大林組、奥村組、鹿島、熊谷組、西武建設、大成建設、竹中工務店、戸田建設、フジタ工業、前田建設工業）【2020増築・改修】清水・馬淵・大洋JV

## 26 西部水再生センター 管理本館



●所在地：戸塚区東俣野町231 ●竣工年：1981（昭和56）年 ●延べ面積：8,947㎡ ●構造種別：SRC造 ●階数：地上3階、地下1階 ●設計者：横浜建築研究所 ●施工者：〈建築〉大成・五洋・中野JV〈電気〉三沢電気



## 27 都筑工場・ 都筑ふれあいの丘 (都筑地区センター・横浜 あゆみ荘・つづき緑寿荘・ 都筑プール)



●所在地：〔都筑工場〕都筑区平台27-1、〔地区センター、つづき緑寿荘〕都筑区葛が谷2-1、〔都筑プール〕都筑区葛が谷2-2、〔横浜あゆみ荘〕都筑区葛が谷2-3 ●竣工年：1984（昭和59）年 ●延べ面積：〔都筑工場〕28,692㎡、〔都筑ふれあいの丘〕10,730㎡ ●構造種別：SRC造、RC造、S造 ●階数：〔都筑工場〕地上5階、地下3階〔都筑ふれあいの丘〕地上2階、地下1階 ●設計者：〔都筑工場〕東畑建築事務所〔都筑ふれあいの丘〕日建設計 ●施工者：〔都筑工場〕〈建築〉前田・東急・山岸JV〈電気〉共栄・山本JV〈空調〉新日空・東横JV〈衛生〉新日空・東横JV〔都筑ふれあいの丘〕〈建築〉銭高・奈良JV、山岸・広川JV、工藤・土志田JV〈電気〉弘電・山本JV〈空調〉三冷・光JV〈衛生〉東横・橘JV〈昇降機〉横浜エレベータ

## 28 横浜人形の家



●所在地：中区山下町18 ●竣工年：1986（昭和61）年 ●延べ面積：3,929㎡ ●構造種別：SRC造一部S造 ●階数：地上5階 ●設計者：坂倉建築研

究所 ●施工者：〈建築〉竹中・日成JV〈電気〉新興電設工業〈空調〉鈴木商会〈衛生〉高田設備〈昇降機〉横浜エレベータ

## 29 中央卸売市場本場 (再整備)



●所在地：神奈川県山内町1 ●竣工年：〔水産棟〕1986（昭和61）年、〔青果棟〕1992（平成4）年 ●延べ面積：132,453㎡ ●構造種別：SRC造 ●階数：地上6階、地下1階 ●設計者：日建設計 ●施工者：【1986水産物部施設改築】〈建築〉大成・鴻池・山岸JV〈電気〉共栄・藤沢JV〈空調〉川本工業〈衛生〉大澤・渡辺JV〈昇降機〉横浜エレベータ【1992青果部施設改築】〈建築〉鹿島・間・三木・山岸・大洋JV〈電気〉共栄・藤沢・飯島JV〈空調〉光電社〈衛生〉トーヨコ・渡辺工業JV〈昇降機〉横浜エレベータ

## 30 消防司令センター



●所在地：保土ヶ谷区川辺町2-9 ●竣工年：1986（昭和61）年 ●延べ面積：2,935㎡ ●構造種別：SRC造 ●階数：地上5階 ●設計者：松田平田坂

本設計事務所 ●施工者：〈建築〉渡辺組・酒井JV〈電気〉三和電業社〈空調〉昭和設備工業〈衛生〉三沢電機〈昇降機〉横浜エレベータ

## 31 横浜港 シンボルタワー



●所在地：中区本牧ふ頭1-16 ●竣工年：1986（昭和61）年 ●延べ面積：1,091㎡ ●構造種別：SRC造一部S造 ●階数：地上6階 ●設計者：国建築事務所 ●施工者：〈建築〉奥村組、関工務店〈電気〉藤沢電気〈空調衛生〉牛田工務所〈昇降機〉日立製作所

## 32 市民文化会館 関内ホール



●所在地：中区住吉町4-42-1 ●竣工年：1986（昭和61）年 ●延べ面積：10,098㎡ ●構造種別：SRC造 ●階数：地上5階、地下2階 ●設計者：【当初・2018改修】芦原建築設計研究所 ●施工者：【当初】〈建築〉清水・三井・馬淵JV〈電気〉共栄社・光電社JV〈空調〉川本・光電社JV〈衛生〉昭和設備工業〈昇降機〉日本オーチス・エレベータ〈舞台照明〉松村電機製作所〈自家発電機〉東洋電機製造〈舞台音響〉松下通信工業【2018改修】〈建築〉小俣・岡山JV〈電気〉東電同窓電気〈空調〉川本・康栄社JV〈衛生〉川本工業〈昇降機〉中央エレベーター工業〈電気通信〉東電同窓電気〈受変電

設備) 東電同窓・窪倉JV〈舞台照明〉  
松村電機製作所〈自家発電機〉荏原商  
事〈舞台音響〉アセント

### 33 横浜市民ギャラリー (旧いせやま会館)



●所在地：西区宮崎町26-1 ●竣工年：1988(昭和63年)年 ●延べ面積：3,428㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上4階、地下1階 ●設計者：松本陽一設計事務所 ●施工者：【当初】〈建築〉熊谷組・馬淵JV〈電気〉三沢電気〈空調〉川本工業〈衛生〉興信工業〈昇降機〉日立製作所【2014市民ギャラリー改修時】〈建築〉小俣組〈電気〉清進電設〈空調衛生〉ピオン・万里JV〈昇降機〉中央エレベーター工業

### 34 三溪記念館



●所在地：中区本牧三之谷58-1 三溪園内 ●竣工年：1988(昭和63)年 ●延べ面積：1,642㎡ ●構造種別：RC造、寄棟造銅板葺 ●階数：地上1階 ●設計者：大江宏建築事務所 ●施工者：〈建築〉戸田・関JV〈電気〉東電同窓電気〈衛生〉牛田工業所〈空調〉川本工業

### 35 横浜みなと博物館



日刊建設通信新聞社提供

●所在地：西区みなとみらい二丁目1-1 日本丸メモリアルパーク内 ●竣工年：1988(昭和63)年 ●延べ面積：7,146㎡ ●構造種別：SRC造 ●階数：地上1階、地下1階 ●設計者：三菱地所一級建築士事務所 ●施工者：〈建築〉大成・大林・フジタ・山岸・馬淵JV〈電気〉共栄社・電成社JV〈空調〉トーヨコ・山本JV〈衛生〉日宝工業〈昇降機〉日本オーチス・エレベーター、三菱重工業

### 36 横浜美術館



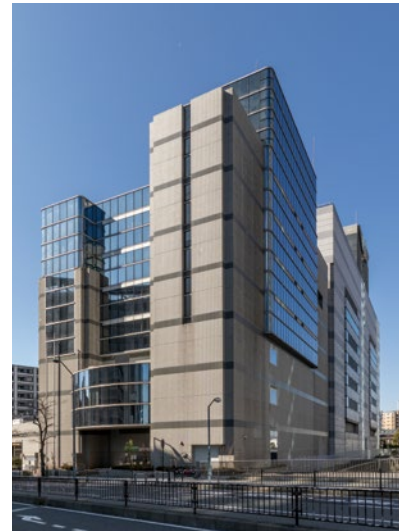
●所在地：西区みなとみらい三丁目4-1 ●竣工年：1989(平成元年)年 ●延べ面積：26,829㎡ ●構造種別：SRC造一部RC造、S造 ●階数：地上8階 ●設計者：【当初】丹下健三・都市・建築設計研究所【2023改修】丹下都市建築設計 ●施工者：【当初】〈建築〉竹中・清水・東急・奥村・佐藤・奈良JV〈電気〉共栄社・山本・電成社・成電社JV〈空調〉大暖・川本・トーヨコ・光電JV〈衛生〉昭和・興信・戸塚JV〈昇降機〉東芝〈展示〉丹青社、横浜松坂屋〈特別高圧受変電〉富士電機〈自家発電〉東芝〈電波障害除去〉通信設備【2023改修】〈建築〉清水・小俣・三木JV〈電気〉共栄・シンデン・矢口JV〈空調〉川本工業・ヨコレイ・関東設備JV〈衛生〉エルゴテック・杉山管工JV

### 37 横浜アリーナ



●所在地：港北区新横浜三丁目10 ●竣工年：1989(平成元年)年 ●延べ面積：45,800㎡ ●構造種別：SRC造 ●階数：地上5階 ●設計者：竹中工務店 ●施工者：竹中工務店

### 38 みなとみらい21・クリーンセンター



●所在地：中区桜木町1-1-56 ●竣工年：1990(平成2)年 ●延べ面積：6,669㎡ ●構造種別：SRC造 ●階数：地上8階、地下1階 ●設計者：【当初】東畑建築事務所【2020改修】須山設計 ●施工者：【当初】〈建築〉清水・飛鳥・日成JV〈電気〉三和・朝日JV〈衛生〉トーヨコ〈空調〉大澤工業〈集塵〉三菱重工・日本鋼管・神戸製鋼JV〈昇降機〉横浜エレベーター【2020改修】【第1期】〈建築工事〉工藤建設〈電気〉東邦電設〈空調衛生〉ニッセツ〈昇降機〉横浜エレベーター【第2期】〈建築〉筒見工務店〈電気〉三沢電機〈空調衛生〉万里設備〈昇降機〉横浜エレベーター



## 39 横浜市立大学 附属病院



●所在地：金沢区福浦三丁目9 ●竣工年：1991（平成3）年 ●延べ面積：57,115㎡ ●構造種別：S造一部SRC造 ●階数：地上10階、地下1階 ●設計者：横浜市立大学医学部附属病院設計JV（松田平田坂本設計事務所十伊藤喜三郎建築研究所） ●施工者：〈建築〉熊谷・鹿島・間・東急・紅梅・渡辺JV 〈電気〉日本電設・共栄・電成・山本JV 〈空調〉高砂・川本・三建・光電・福島JV 〈衛生〉トーヨコ・一説・大澤・渡辺JV 〈昇降機〉東芝〈土木〉保土ヶ谷・新栄JV 〈搬送〉シーメンス 〈特別高圧受変電〉日新電機〈自家発電〉東洋電機製造

## 40 障害者 スポーツ文化センター 横浜ラポール



●所在地：港北区鳥山町1752 ●竣工年：1992（平成4）年 ●延べ面積：28,818㎡ ●構造種別：SRC造 ●階数：地上3階、地下1階 ●設計者：東畑建築事務所 ●施工者：〈建築〉西松・銭高・大木・奈良・紅梅JV 〈電気〉共栄社・山本・山正・飯島JV 〈空調〉川本・昭和・鈴木・ヨコレイJV 〈衛生〉日宝工業・矢崎設備・光設備JV 〈昇降機〉東芝〈自家発電〉明電舎 〈舞台照明〉丸茂電機〈舞台音響〉不二音響

## 41 上郷・森の家



●所在地：栄区上郷町1499-1 ●竣工年：1992（平成4）年 ●延べ面積：6,891㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上2階、地下1階 ●設計者：【当初】内井昭蔵建築設計事務所【2019再整備】デザインの森（PFI事業者：上郷フォレストPFI株式会社） ●施工者：【当初】〈建築〉東急・村本・山岸・紅梅JV 〈電気〉三沢・三興JV 〈空調〉トーヨコ・鈴商・福崎JV 〈衛生〉日宝・太陽JV 〈昇降機〉日本エレベーター製造 【2019再整備】紅梅組（PFI事業者：上郷フォレストPFI株式会社）

## 42 道志村水源林 管理所



●所在地：山梨県南都留郡道志村9020 ●竣工年：1992（平成4）年 ●延べ面積：465㎡ ●構造種別：S造、木造 ●階数：地上2階 ●設計者：須山設計 ●施工者：長田産業

## 43 南図書館・ 弘明寺公園プール



●所在地：南区弘明寺町265-1 ●竣工年：1992（平成4）年 ●延べ面積：2,805㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上4階 ●設計者：相和技術研究所 ●施工者：〈建築〉清水・京急JV 〈電気〉藤澤電気〈空調衛生〉光電社〈昇降機〉日本エレベーター製造

## 44 大岡健康プラザ （南スポーツセンター・ 大岡地区センター・ 地域ケアプラザ）



●所在地：南区大岡一丁目14-1 ●竣工年：1992（平成4）年 ●延べ面積：6,753㎡ ●構造種別：RC造他 ●階数：地上3階 ●設計者：松本陽一設計事務所 ●施工者：〈建築〉佐藤・松尾JV 〈電気〉富士・朝日JV 〈空調〉昭和・杉山JV 〈衛生〉昭和設備工業〈昇降機〉横浜エレベーター

## 45 大さん橋ふ頭ビル



●所在地：中区海岸通1-1 ●竣工年：1993（平成5）年 ●延べ面積：5,985㎡

●構造種別：S造 ●階数：地上5階 ●設計者：松田平田設計 ●施工者：〈建築〉地崎・松尾JV〈電気〉シンデン〈空調〉川本・渡辺JV〈衛生〉豊正工業〈昇降機〉東芝エレベータテクノス

## 46 野島青少年 研修センター



●所在地：金沢区野島町24-2 ●竣工年：1993（平成5）年 ●延べ面積：3,967㎡ ●構造種別：RC造一部SRC造 ●階数：地上2階、地下1階 ●設計者：田辺洋建築設計事務所 ●施工者：〈建築〉富士工・渡辺JV〈電気〉日宝工業〈空調衛生〉昭和・戸塚JV〈昇降機〉横浜エレベータ

## 47 こどもログハウス (ロケットハウス)



●所在地：青葉区美しが丘二丁目22美しが丘公園内 ●竣工年：1993（平成5）年 ●延べ面積：279㎡ ●構造種別：木造 ●階数：地上2階、地下1階 ●設計者：創和設計 ●施工者：〈建築〉小林建設林産〈電気〉大貫電興社

## 48 急な坂スタジオ・ 野毛山荘(旧老松会館)



●所在地：西区老松町26-1 ●竣工年：1993（平成5）年 ●延べ面積：3,487㎡ ●構造種別：SRC造 ●階数：地上3階、地下1階 ●設計者：建築モード研究所 ●施工者：〈建築〉松村・紅梅JV〈電気〉藤沢電気〈空調衛生〉昭和・大洋JV〈昇降機〉横浜エレベータ〈土木〉トーヨー建設

## 49 中央図書館



●所在地：西区老松町1 ●竣工年：1994（平成6）年 ●延べ面積：24,520㎡ ●構造種別：S造、SRC造 ●階数：地上5階、地下3階 ●設計者：前川建築設計事務所 ●施工者：〈建築〉竹中・東急・松村・紅梅・和同JV〈電気〉三ツ沢・新興・江電社・三興JV〈空調〉トーヨー理研・山本・鈴工福島JV〈衛生〉トーヨー理研・有賀JV〈自家発電〉明電舎〈昇降機〉三菱電機〈書籍搬送〉シーメンス

## 50 歴史博物館



●所在地：都筑区中川中央一丁目18-1 ●竣工年：1994（平成6）年 ●延べ面積：9,269㎡ ●構造種別：SRC造一部RC造 ●階数：地上6階、地下1階 ●設計者：大高建築設計事務所 ●施工者：〈建築〉間・大末・山岸・奈良JV〈電気〉扶桑・山本JV〈空調衛生〉トーヨー理研・矢崎・豊正JV〈自

家発電〉富士電機〈講堂視聴覚設備〉松下通信工業〈昇降機〉フジテック

## 51 横浜能楽堂



横浜能楽堂提供

●所在地：西区紅葉ヶ丘27-2 掃部山公園内 ●竣工年：1996（平成8）年 ●延べ面積：5,696㎡ ●構造種別：SRC造 ●階数：地上2階、地下2階 ●設計者：【当初】大江宏建築事務所【改修】松田平田設計 ●施工者：〈建築〉竹中・住友・紅梅JV〈電気〉三沢・江電社JV〈空調〉川本・フクザキJV〈衛生〉光電社〈駐車場機械設備〉三菱重工業〈昇降機〉フジテック〈舞台照明〉松下電工〈舞台音響〉日本ビクター

## 52 高齢者保養 研修施設ふれーゆ



●所在地：鶴見区末広町1-15-2 ●竣工年：1996（平成8）年 ●延べ面積：7,630㎡ ●構造種別：RC造一部S造、SRC造 ●階数：地上3階 ●設計者：山下設計 ●施工者：〈建築〉松尾・工藤JV〈電気〉富士・江電JV〈空調衛生〉日宝・興信JV



## 53 下和泉地区センター ・地域ケアプラザ



●所在地：泉区和泉が丘一丁目26-1  
●竣工年：1996（平成8）年 ●延べ面積：3,108㎡ ●構造種別：RC造一部S造 ●階数：地上2階、地下1階 ●設計者：山本理顕設計工場 ●施工者：〈建築〉大洋建設〈電気〉東電同窓電機〈空調〉三沢電気〈衛生〉金子工業所〈昇降機〉シンドラーエレベータ

## 54 篠原地区センター ・地域ケアプラザ



●所在地：港北区篠原東二丁目15-27  
●竣工年：1997（平成9）年 ●延べ面積：3,250㎡ ●構造種別：RC造、一部S造 ●階数：地上3階、地下1階 ●設計者：楨総合計画事務所 ●施工者：〈建築〉サンゴ〈電気〉日宝工業〈空調〉鈴木商会〈衛生〉京浜設備工業所〈昇降機〉シンドラーエレベータ

## 55 東永谷地区センター ・地域ケアプラザ



●所在地：港南区東永谷1-1-12 ●竣工年：1997（平成9）年 ●延べ面積：2,803㎡ ●構造種別：RC造一部S造

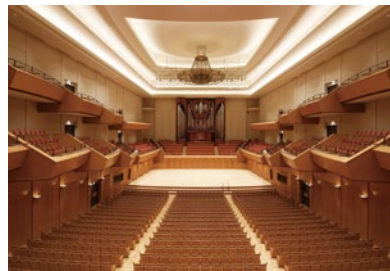
●階数：地上2階 ●設計者：伊東豊雄建築設計事務所 ●施工者：〈建築〉千代田アクタス〈電気〉三興電設〈衛生〉フクザキコーポレーション〈空調〉太陽・サノセキJV〈昇降機〉横浜エレベータ

## 56 西スポーツセンター ・浅間町営業所



●所在地：西区浅間町4-340-1 ●竣工年：1997（平成9）年 ●延べ面積：7,777㎡ ●構造種別：SRC造 ●階数：地上4階 ●設計者：久米設計 ●施工者：〈建築〉紅梅・小俣JV〈電気〉三沢電機〈空調〉川本工業〈衛生〉大澤工業〈昇降機〉フジテック〈コージェネレーション・自家発電〉三菱電機〈機械式駐車設備〉東急パーキングシステムズ

## 57 横浜みなとみらい ホール



●所在地：西区みなとみらい二丁目3-6 ●竣工年：1997（平成9）年 ●延べ面積：18,689㎡ ●構造種別：SRC造一部S造 ●階数：地上7階、地下1階 ●設計者：日建設計 ●施工者：【当初】大成・鹿島・東急他 JV ※民間で「クイーンズスクエア」として建設【2022改修】〈建築〉鹿島・NB・石井JV〈電気〉シンデン・矢口JV、きんでん〈空調〉エルゴテック・杉山管工JV〈衛生〉川本工業〈舞台音響〉ヒビノスペーステック〈舞台照明〉松村電機製作所〈昇降機〉日本オーチス・エレベータ

## 58 長浜ホール (横浜検疫所長浜措置場 旧事務棟)



●所在地：金沢区長浜114-4 長浜野口記念公園内 ●竣工年：1997（平成9）年復元 ●延べ面積：984㎡ ●構造種別：S造一部RC造 ●階数：地上2階、地下1階 ●設計者：【当初】河合政市【1997復元】AUR建築・都市・研究コンサルタント ●施工者：【当初】不明【1997復元】〈建築〉トーヨー建設〈電気〉幸陽電気〈空調衛生〉フクザキコーポレーション

## 59 栄区民文化センター リリス



●所在地：栄区小菅ヶ谷一丁目2-1 ●竣工年：1997（平成9）年 ●延べ面積：31,832㎡うち本施設面積 2,977㎡ ●構造種別：SRC造 ●階数：地上6階、地下2階 ●設計者：松本陽一設計事務所 ●施工者：〈建築〉大林・松井・三木・明誠・白井JV〈電気〉東光・関口・阿部JV〈空調〉三機・大澤・矢崎JV〈衛生〉川本・昭和・戸塚JV〈昇降機〉日本オーチス・エレベータ

## 60 横浜国際総合競技場 (日産スタジアム)



●所在地：港北区小机町3300 新横浜公園内 ●竣工年：1997（平成9）年  
●延べ面積：172,759㎡ ●構造種別：PCaPC造 ●階数：地上7階 ●設計者：松田平田・東畑設計JV ●施工者：〈建築〉【第1工区、フィールド工区】竹中・奈良JV【第2工区】銭高・日本鋼管JV【第3工区】日本国土・渡辺JV【第4工区】佐藤・三木JV〈電気〉きんでん・共栄社JV〈空調〉新日空・大澤JV〈衛生〉川本・山本電気水道JV〈昇降機〉ダイコー、シンドラーエレベータ〈人工地盤〉三木・渡辺JV、竹中・駿河JV

## 61 よこはま動物園 南入口ゾーン (管理センター、アクアテラス、 リングゲート)



●所在地：旭区上白根町1175-1 横浜動物の森公園ズーラシア内 ●竣工年：1998（平成10）年 ●延べ面積：〔管理センター〕2,349㎡〔アクアテラス〕756㎡ ●構造種別：〔管理センター〕SRC造、〔アクアテラス〕S造一部RC造 ●階数：〔管理センター〕地上2階、地下1階〔アクアテラス〕地上1階 ●設計者：高松伸建築設計事務所 ●施工者：〈建築〉三木・駿河JV〈空調〉光電社〈衛生〉有賀工業〈電気〉三興電設〈昇降機〉守谷輸送機工業

## 62 馬場花木園休憩棟



●所在地：鶴見区馬場二丁目20-1 馬場花木園内 ●竣工年：1998（平成10）年 ●延べ面積：160㎡ ●構造種別：S造 ●階数：地上1階 ●設計者：プランテック総合計画事務所 ●施工者：〈建築〉小松工務店〈電気〉フタバ電業社〈空調衛生〉日本工業所

## 63 洗手亭



●所在地：中区山下町203地先 ●竣工年：1998（平成10）年 ●延べ面積：48㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上1階 ●設計者：須山設計、RA建築設計 ●施工者：〈施工者〉青柳組〈企画協力、部材寄付〉横浜中華街発展会協同組合

## 64 横浜国際プール



●所在地：都筑区北山田七丁目3-1 ●竣工年：1998（平成10）年 ●延べ面積：35,877㎡ ●構造種別：RC造、SRC造、S造 ●階数：地上3階、地下2階 ●設計者：創造社 ●施工者：〈建築〉【第1工区】大成・地崎・工藤JV【第2工区】石井建設工業〈電気〉扶

桑・富士鋼管JV〈空調〉川本・光電・鈴商JV〈衛生〉トーヨーコ理研・山本・矢崎JV〈土木〉奈良建設〈大型映像表示設備〉ソニー〈自家発電〉明電舎〈昇降機〉三菱電機

## 65 横浜市立大学附属 市民総合医療 センター



●所在地：南区浦舟町4-57 ●竣工年：1999（平成11）年 ●延べ面積：58,363㎡ ●構造種別：S造、SRC造、RC造 ●階数：地上15階、地下2階 ●設計者：横河建築設計 ●施工者：〈建築〉竹中・日本国土・紅梅・相鉄JV〈電気〉電設工・四電工・共栄社JV〈空調〉エルゴテック・三機・大澤JV〈衛生〉西原衛生・大成温調・日宝JV〈昇降機〉日立製作所〈昇降機2〉横浜エレベータ〈特別高圧受変電〉東芝〈自家発電廃熱利用〉明電舎〈搬送〉日本シューター

## 66 横浜にぎわい座



●所在地：中区野毛町3-110-1 ●竣工年：2001（平成13）年 ●延べ面積：14,135㎡ ●構造種別：SRC造 ●階数：地上13階、地下3階 ●設計者：石本建築事務所、アクト環境計画（劇場部分協同） ●施工者：〈建築〉大成・銭高・三木・イワキJV〈電気〉共栄社・新興JV〈空調衛生〉エルゴテック・昭和JV〈昇降機〉横浜エレベータ



## 67 野庭地区センター・地域ケアプラザ



●所在地：港南区野庭町612 ●竣工年：2001（平成13）年 ●延べ面積：2,850㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上3階 ●設計者：国設計 ●施工者：〈建築〉馬淵・小俣JV〈電気〉三沢電機〈空調〉山本電気水道〈衛生〉コムロ〈昇降機〉日本オーチス・エレベータ

## 68 北部斎場



●所在地：緑区長津田町5125-1 ●竣工年：2002（平成14）年 ●延べ面積：20,049㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上2階、地下1階 ●設計者：竹山実建築総合研究所 ●施工者：〈建築〉清水・東急・長谷工・土志田JV〈電気〉電成・山本・江電JV〈空調〉エルゴテック・川本・昭和JV〈衛生〉日宝・鈴商JV〈昇降機〉三菱電機〈自家発電〉明電舎〈火葬炉〉宮本工業所〈斎場関連施設〉菅野建設〈土木〉大竹興業、本田建設〈2号遊水池〉清水・東急・長谷工・土志田JV

## 69 横浜港大さん橋国際客船ターミナル



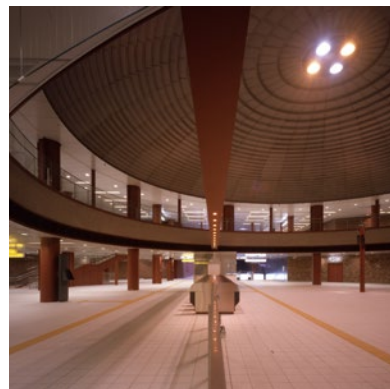
●所在地：中区海岸通1-1-4 ●竣工年：2002（平成14）年 ●延べ面積：約44,000 ●構造種別：S造一部RC造（折板構造十ガーダー構造） ●階数：地上2階、地下1階 ●設計者：foa ●施工者：〈建築〉【1工区】清水・東亜・日本鋼管・松尾JV【2工区】鹿島・フジタ・相鉄・工藤JV【3工区】戸田・東急・山岸・駿河JV〈電気〉扶桑・シンデン・江電社JV〈空調〉エルゴテック・大澤・光電社JV〈衛生〉川本・昭和・太陽JV〈受変電〉富士電機〈発電機〉三菱電機〈搬送機〉トーヨーカネツ〈昇降機〉横浜エレベータ

## 70 みなと赤十字病院



●所在地：中区新山下三丁目12-1 ●竣工年：2003（平成15）年 ●延べ面積：74,148㎡ ●構造種別：SRC造（免震構造） ●階数：地上8階、地下1階、塔屋2階 ●設計者：伊藤喜三郎建築研究所 ●施工者：〈建築〉【病院棟工区】清水・大林・大成・三星・佐藤・飛鳥・安藤・渡辺・紅梅・奈良JV【エネルギーセンター棟工区】山岸・相鉄・千代田アクタスJV〈空調〉川本・新菱・日宝・鈴商JV〈衛生〉ダイダン・三建・興新・山本JV〈電気〉きんでん・トーエネック・共栄社・三沢電機JV〈昇降機〉三菱電機、横浜エレベータ、日本エレベーター製造

## 71 みなとみらい線馬車道駅



●所在地：中区本町5-49 ●竣工年：2004（平成16）年 ●延べ面積：10,312㎡ ●構造種別：RC造、S造 ●階数：地上1階、地下3階 ●設計者：内藤廣建築設計事務所 ●施工者：戸田建設

## 72 倉田コミュニティハウス



●所在地：戸塚区上倉田町1865-4 ●竣工年：2006（平成18）年 ●延べ面積：378㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上2階 ●設計者：シグマ建築企画 ●施工者：〈建築〉小雀建設〈電気〉大井電業社〈空調衛生〉イエス〈昇降機〉ダイコー

## 73 アメリカ山公園（立体都市公園）



●所在地：中区山手町97-1 ●竣工年：2009（平成21）年 ●延べ面積：3,954㎡（駅舎増築部分） ●構造種別：RC造 ●階数：地上5階、地下4階 ●設計者：八千代エンジニアリング ●施工者：〈建築〉熊谷・東洋JV〈電気〉扶桑電気〈機械〉川本工業

## 74 象の鼻テラス



Photo:DAICI ANO

●所在地：中区海岸通1 象の鼻パーク内 ●竣工年：2009（平成21）年 ●延べ面積：604㎡ ●構造種別：S造 ●階数：地上1階 ●設計者：小泉アトリエ ●施工者：〈建築〉渡辺組〈電気〉横山電気工業〈空調衛生〉神奈川産業

## 75 瀬谷区総合庁舎 （瀬谷区役所・瀬谷公会堂 ・瀬谷消防署）



環境デザイン研究所提供

●所在地：瀬谷区二ツ橋町190 ●竣工年：〔公会堂〕2010（平成22）年〔区役所・消防署〕2012（平成24）年 ●延べ面積：15,369㎡ ●構造種別：RC造、SRC造 ●階数：地上5階、地下1階 ●設計者：環境デザイン研究所、NTTファシリティーズ（PFI事業者：グリーンファシリティーズ瀬谷株式会社） ●施工者：鹿島建設（PFI事業者：グリーンファシリティーズ瀬谷株式会社）

## 76 動物愛護センター



●所在地：神奈川区菅田町75-4 ●竣工年：2011（平成23）年 ●延べ面積：2,858㎡ ●構造種別：RC造、木造 ●階数：地上2階、地下1階 ●設計者：湯澤建築設計事務所 ●施工者：〈建築〉松尾・石井JV〈電気〉東洋電装〈空調〉川本工業〈衛生〉司工事〈昇降機〉日立ビルシステム〈土木〉親和興業〈フェンス〉リョーコー

## 77 野毛山展望台



●所在地：西区老松町63-10 野毛山公園内 ●竣工年：2011（平成23）年 ●延べ面積：140㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上2階 ●設計者：松本陽一設計事務所 ●施工者：〈建築〉森田建設〈電気〉中央電器住設

## 78 衛生研究所



●所在地：金沢区富岡東二丁目7-1 ●竣工年：2014（平成26）年 ●延べ面積：7,653㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上7階 ●設計者：伊藤喜三郎建築研究所 ●施工者：〈建築〉馬淵・紅梅JV〈電気〉電成社・会津電業社JV〈空調〉川本・エルゴテック・ヨコレイJV〈衛生〉南・ホーセンJV〈自家発電〉大崎電設〈昇降機〉中央エレベーター工業〈外構〉新栄重機土木〈植栽〉ダイヤ緑地

## 79 南区総合庁舎 （南区役所・南公会堂・ 南土木事務所・南消防署）



●所在地：南区浦舟町2-33 ●竣工年：2016（平成28）年 ●延べ面積：27,589㎡ ●構造種別：CFT造、S造、RC造 ●階数：地上7階、地下1階 ●設計者：石本建築事務所 ●施工者：〈建築〉【第1工区】大成・工藤・風越JV【第2工区】馬淵・小俣JV【第3工区】渡辺・根本JV〈電気〉【第1・2工区】シンデン・共栄・窪倉JV【第3工区】横森電気工業〈空調〉【第1・2工区】川本・ヨコレイ・サノセキJV【第3工区】川本工業〈衛生〉【第1・2工区】万里・ピオンJV【第3工区】川本工業〈昇降機〉【第1・2工区】中央エレベーター工業【第3工区】三菱電機〈自家発電〉明電舎〈地下燃料タンク置場〉馬淵・小俣JV〈舞台照明〉松村電機製作所〈舞台音響・映像〉ヤマハサウンドシステム



## 80 横浜市立大学 YCUスクエア



●所在地：金沢区瀬戸22-2 ●竣工年：2016（平成28）年 ●延べ面積：4,100㎡ ●構造種別：RC造一部S造 ●階数：地上5階 ●設計者：山本理顕設計工場 ●施工者：〈建築〉渡辺・見上JV〈電気〉共栄・会津JV〈空調〉エルゴテック・ヨコレイJV〈衛生〉万里設備〈昇降機〉東芝エレベータ〈外構電気〉太洋電設〈外構〉錦興建設〈植栽〉篠原造園建設

## 81 蒔田消防出張所



●所在地：南区宿町3-54-5 ●竣工年：2016（平成28）年 ●延べ面積：768㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上3階 ●設計者：湯澤建築設計研究所 ●施工者：〈建築〉馬淵建設〈空調衛生〉相模設備工業〈通信指令〉日本電気〈電気〉横山電気工業

## 82 市電保存館 しでんほーる



日刊建設通信新聞社提供

●所在地：磯子区滝頭三丁目1-53 ●竣工年：2016（平成28）年 ●延べ面積：287㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上2階 ●設計者：abanba ●施工者：安藤建設

## 83 金沢区総合庁舎（金沢区役所・金沢公会堂・金沢消防署）



●所在地：金沢区泥亀二丁目9-1 ●竣工年：【第1工区】2016（平成28）年【第2・3工区】2018（平成30）年 ●延べ面積：20,535㎡ ●構造種別：CFT造一部S造、RC造、SRC造 ●階数：地上8階 ●設計者：国設計 ●施工者：〈建築〉【第1工区】松尾・小俣・大洋JV【第2工区】小俣組【第3工区】小俣・日成・安藤JV〈電気〉【第1工区】電成・丸子・栄光JV【第2・3工区】向洋・ケイテクノJV〈空調〉【第1工区】エルゴテック・神奈川保健・矢崎JV【第2・3工区】エルゴテック・矢崎設備JV〈衛生〉【第1工区】ピオン・万里JV【第2・3工区】エルゴテック・有賀JV〈自家発電〉明電舎〈昇降機〉【第1工区】中央エレベーター工業【第3工区】フジテック〈外構〉【第1工区】新世【第2・3工区】青野建設〈舞台照明〉【第2・3工区】松村電機製作所〈舞台音響・映像設備〉【第2・3工区】ヤマハサウンドシステム

## 84 港南区総合庁舎（港南区役所・港南消防署）



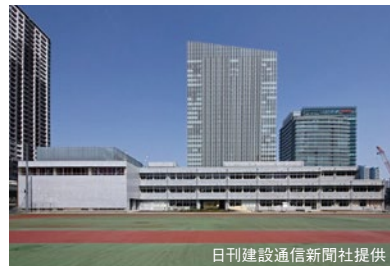
●所在地：港南区港南四丁目2-10 ●竣工年：2017（平成29）年 ●延べ面積：17,334㎡ ●構造種別：S造一部CFT造、SRC造、RC造 ●階数：地上8階、地下1階 ●設計者：小泉アトリエ ●施工者：〈建築〉【第1工区】渡辺・見上JV【第2工区】鹿島・谷津・中島JV〈電気〉神奈川ケイテクノ・向洋電機土木・尾鈴電気JV〈空調〉三沢・光電・エヌ・ケイJV〈衛生〉興信・岳南JV〈昇降機〉フジテック〈自家発電〉明電舎〈機械式駐車設備〉横浜エレベータ〈外構〉湘南建設〈緑化〉錦光園

## 85 日野こもれび納骨堂



●所在地：港南区日野中央一丁目13-2 ●竣工年：2018（平成30）年 ●延べ面積：1,448㎡ ●構造種別：S造一部RC造 ●階数：地上1階、地下1階 ●設計者：コンテンポラリーーズ ●施工者：〈建築〉渡辺・見上JV〈電気〉浜川電気〈空調衛生〉金子工業所〈自動納骨機械〉光洋自動機〈法面保護〉アウラ・シーイー〈緑地整備〉丸孝造園土木〈造園〉横浜緑地

## 86 みなとみらい本町小学校



日刊建設通信新聞社提供

●所在地：西区高島一丁目2-3 ●竣工年：2018（平成30）年 ●延べ面積：7,984㎡ ●構造種別：S造 ●階数：地上4階 ●設計者：みかんぐみ ●施工者：〈建築〉渡辺・根本・昭和JV〈電気〉シ

ンデン・矢口JV〈空調衛生〉南・ホー  
センJV〈昇降機〉中央エレベーター工業  
〈校庭整備〉奈良建設〈緑化〉相武造  
園土木〈防護施設〉K.Y.S

## 87 荏田コミュニティ ハウス



●所在地：青葉区あざみ野南一丁目  
4-1 ●竣工年：2019（平成31）年 ●延  
べ面積：250㎡ ●構造種別：S造 ●階  
数：地上1階 ●設計者：川喜田建築設  
計事務所 ●施工者：〈建築〉伊勝〈電  
気〉三光電業〈空調衛生〉イエス

## 88 寿町健康福祉 交流センター・ 寿町スカイハイツ



●所在地：中区寿町4-14 ●竣工年：  
2019（令和元）年 ●延べ面積：7,694  
㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上9階、  
地下1階 ●設計者：小泉アトリエ ●施  
工者：〈建築〉松尾・小俣・土志田JV〈電  
気〉共栄・栄光JV〈空調〉エヌ・ケイ・テ  
クノ〈衛生〉万里・ピオンJV〈昇降機〉三  
菱電機ビルテクノサービス〈スロープ・広  
場〉菅野建設

## 89 保土ヶ谷消防署



●所在地：保土ヶ谷区神戸町140-5 ●  
竣工年：2020（令和2）年 ●延べ面積：  
2,627㎡ ●構造種別：RC造一部S造  
●階数：地上3階 ●設計者：日生建築  
計画研究所 ●施工者：〈建築〉大洋・  
信友JV〈電気〉新興電設工業〈空調衛  
生〉エルゴテック〈昇降機〉中央エレ  
ベーター工業〈通信指令設備〉日本電気  
〈歩道等改良〉新都市建設

## 90 8代目市庁舎



●所在地：中区本町6-50-10 ●竣工  
年：2020（令和2年）年 ●延べ面積：  
142,582㎡ ●構造種別：S造、CFT造  
他、中間層免震構造十制振構造 ●階  
数：地上32階、地下2階 ●設計者：竹  
中工務店、楨総合計画事務所 ●施  
工者：竹中・西松JV ●別途発注工事 中  
層部施工：〈建築〉【第1工区】NB建設  
【第2工区】小俣組〈電気〉【第1・2工  
区】扶桑・日宝JV〈空調〉三沢・興信・  
三光JV〈衛生〉エルゴテック、その他施  
工：〈マルチサイン設備〉東洋電装・神  
電設備工業JV〈防犯・入退室管理設  
備〉三沢・セイブJV〈監視カメラ設備〉  
きんでん〈映像・音響設備〉清進・浜川  
JV〈議場・委員会設備〉システムエン  
지니어リング〈構内交換設備〉東日本電  
信電話〈間仕切り壁設置〉土志田建設  
〈サイン設置〉土志田建設〈駐車管制  
設備〉東洋電装

## 91 横浜市立市民病院



●所在地：神奈川区三ツ沢西町1-1 ●  
竣工年：2020（令和2）年 ●延べ面  
積：79,613㎡ ●構造種別：〔診療棟〕  
S造、一部SRC造、RC造（免震構造）  
〔管理棟〕S造 ●階数：〔診療棟〕地  
上7階、地下2階、塔屋1階〔管理棟〕地  
上4階 ●設計者：佐藤総合計画 ●施  
工者：〔診療棟〕〈建築〉戸田・松尾・  
馬淵JV〈電気〉九電工・大三・丸子JV  
〈空調〉西原衛生・菱和設備JV〈衛  
生〉川本・日本装芸・ヨコレイJV〔管  
理棟〕〈建築〉松尾・奈良JV〈電気〉  
三沢・新興JV〈空調〉川本・康栄社JV  
〈衛生〉エルゴテック

## 92 横浜みなとみらい 国際コンベンション センター（パシフィコ 横浜ノース）



●所在地：西区みなとみらい一丁目1-1  
●竣工年：2020（令和2）年 ●延べ面  
積：46,296㎡ ●構造種別：S造、一部  
SRC造、RC造 ●階数：地上6階、地  
下1階 ●設計者：佐藤総合計画・竹中  
工務店JV（PFI事業者（設計）：横浜グ  
ローバルMICE） ●施工者：竹中・小  
俣JV（PFI事業者（施工）：横浜グロ  
ーバルMICE）



## 93 山下地域ケアプラザ



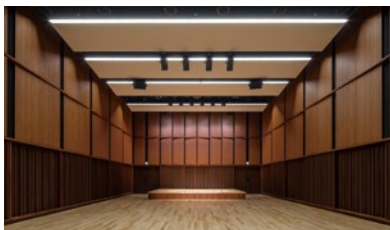
●所在地：緑区北八朔町218-13 ●竣工年：2021（令和3）年 ●延べ面積：462㎡ ●構造種別：木造 ●階数：地上1階 ●設計者：松本陽一設計事務所 ●施工者：〈建築〉昭和建設〈電気〉紘永工業〈空調衛生〉紘永工業

## 94 港南公会堂・港南土木事務所



●所在地：港南区港南中央通10-1 ●竣工年：2021（令和3）年 ●延べ面積：5,941㎡ ●構造種別：RC造、S造、SRC造 ●階数：地上4階、地下1階 ●設計者：新居千秋都市建築設計 ●施工者：〈建築〉松尾・大洋・安藤JV 〈電気〉向洋・エスシーイーJV 〈空調衛生〉ヨコレイ・エヌケイテクノJV 〈昇降機〉フジテック 〈舞台音響・映像設備〉ヤマハサウンドシステム 〈舞台照明設備〉パナソニックLSエンジニアリング 〈リフター整備〉朝日輸送機 〈自家発電設備〉荏原商事 〈道路拡幅〉重田建設企業

## 95 瀬谷区民文化センターあじさいプラザ



●所在地：瀬谷区瀬谷四丁目4-10（ライブゲート瀬谷3階・4階） ●竣工年：2021（令和3）年 ●延べ面積：24,575㎡うち本施設1,611㎡ ●構造種別：RC造一部S造 ●階数：地上10階、地下1階 ●設計者：アール・アイ・エー ●施工者：戸田建設

## 96 都田地区センター・地域ケアプラザ



●所在地：都筑区東方町655-4 ●竣工年：2022（令和4）年 ●延べ面積：1,458㎡ ●構造種別：S造 ●階数：地上2階 ●設計者：金子設計 ●施工者：〈建築〉小俣組〈電気〉メルビック電工〈空調衛生〉シンサナミ〈昇降機〉フジテック

## 97 消防本部庁舎



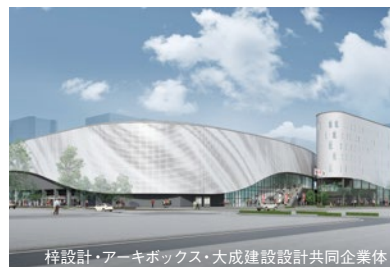
●所在地：保土ヶ谷区川辺町2-20 ●竣工予定：2023（令和5）年 ●延べ面積：14,847㎡ ●構造種別：〔本館〕RC一部PRC・SRC造〔倉庫棟〕S造〔別館〕SRC造 ●階数：〔本館〕地上7階、地下1階、塔屋2階〔倉庫棟〕地上3階〔別館〕地上5階、塔屋1階 ●設計者：松田平田設計 ●施工者：〈建築〉戸田・小俣・小雀JV 〈電気〉メルビック・京浜・東邦JV 〈空調〉川本・康栄社JV 〈衛生〉ピオン工業〈昇降機〉フジテック〈自家発電〉八千代電設工業

## 98 根岸森林公園トイレ（芝生広場前）



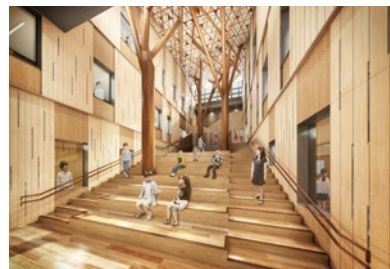
●所在地：中区根岸台 根岸森林公園内 ●竣工予定：2024（令和6）年 ●延べ面積：49㎡ ●構造種別：木造一部S造 ●階数：地上1階 ●設計者：一級建築士事務所nenlin ●施工者：未定

## 99 横浜BUNTAI



●所在地：中区不老町2-7-1 ●竣工予定：2024（令和6）年 ●延べ面積：15,454㎡ ●構造種別：RC造一部S造 ●階数：地上3階 ●設計者：梓・アーキボックス・大成JV（PFI事業者：YOKOHAMA文体） ●施工者：大成・渡辺JV（PFI事業者：YOKOHAMA文体）

## 100 万騎が原小学校



●所在地：旭区大池町66 ●竣工予定：2027（令和8）年 ●延べ面積：〔校舎棟〕5,092㎡、〔体育館・給食室棟〕1,323㎡ ●構造種別：〔校舎棟〕木造〔体育館・給食室棟〕RC造一部S造 ●階数：地上3階 ●設計者：梓・金子JV ●施工者：未定